特41
0 757

御製成歡驛

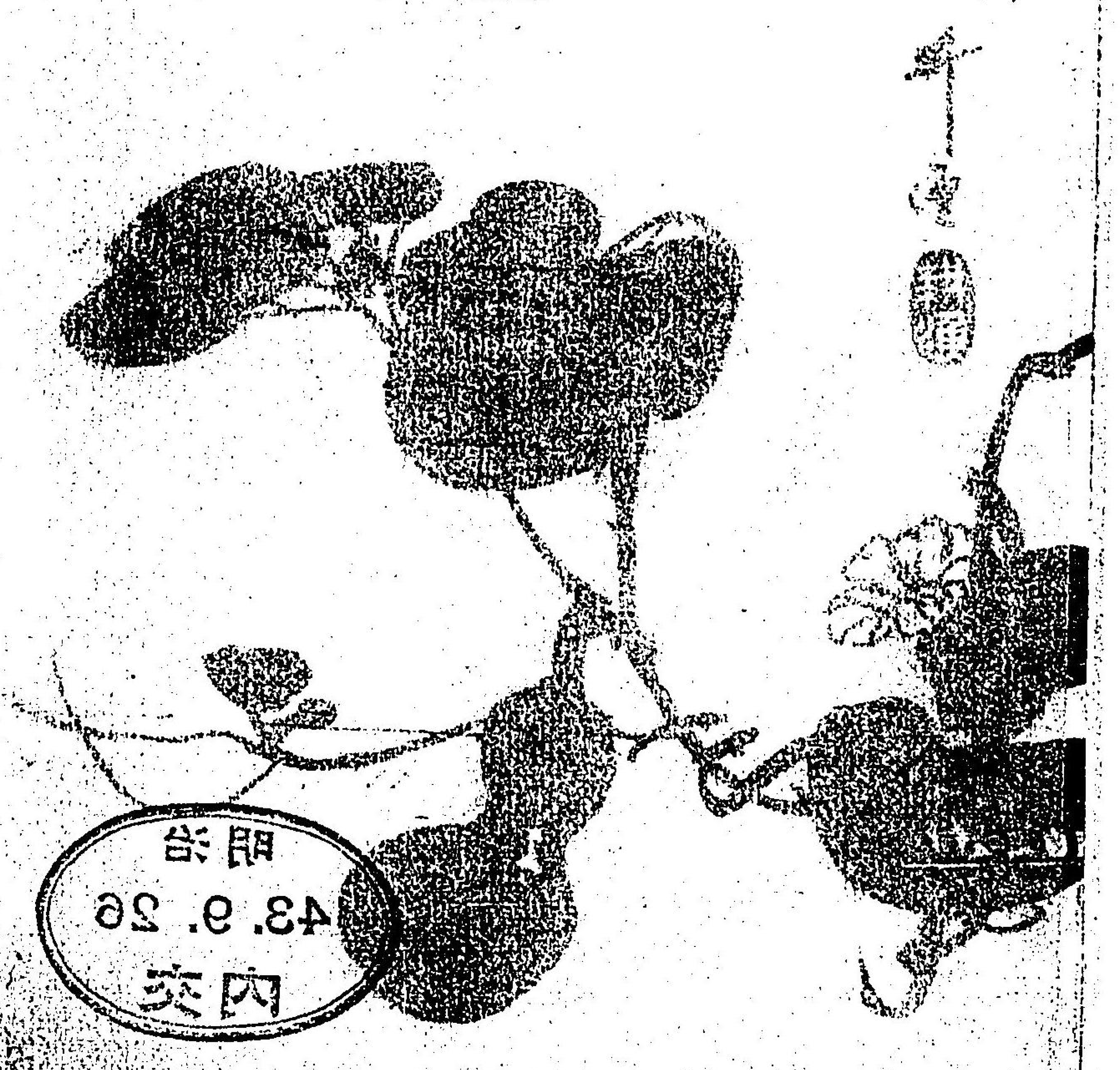
「そも水無月の〱の始め。京城内に日の旗を。おし立て、
そめて我兵の「道遠けれといさみつゝ。敵のあり
かをさぐらんと「斥候の兵を出だしても。心せく
なり日は暮れて「暗さはくらし闇の夜を「たど
りながらに進みゆき。安城渡しをうち渡り「數萬
の敵の守るをも「物のかずとも「なさずして

明治
43. 9. 26
内交

特41
757

御製成歡驛

ロンギ ツヨク上 そも水無月のその始め。京城内に日の旗を。おしたてそめて我兵の シテ上「道遠けれといさみつゝ。敵のありかをさぐらんと 地「斥候の兵を出だしても。心せくなり日は暮れて シテ「暗さはくらし闇の夜を 地「たどりながらに進みゆき。安城渡しをうち渡り シテ「數萬の敵の守るをも 地「物のかずとも シテ「なさずして



明治 43.9.26 内交

はしがき

其文の妙趣味ふべく、其の調の神韵掬すべく、かくして謠曲は現時の大隆盛を來し、忽ち謠本に關して一種の不便を感ぜしむるに至れり。蓋し時代は活字の世の中にして又旅行の世中、而して謠本は皆大高價なる寫本木版又は石版摺なれば也。こゝに其不便を補はんが爲、同志不才自ら顧るの遑なく、世に卒先して輕量安價比類なき活版謠本を編纂せり。謠曲界の爲、裨益する處あらば幸甚也

明治四十三年新涼九月　編輯同人識

地

「攻めよ〳〵と呼ばゝりて成歡驛の砲壘を。うち破りつゝ牙山營。はや乘取りて日の本の。武勇は四方にかゝやけり武勇はよもにかゝやけり

觀世流謠曲錦嚢卷之一總目次

高砂	一	楊貴妃	一六三	誓願寺	三二四
田村	一一	玉葛	一七二	蟻通	三三四
江口	二二	融	一八〇	忠度	三四二
班女	三二	養老	一九一	熊野	三五三
鵜飼	四三	清經	二〇〇	遊行柳	三六五
難波	五二	采女	二一二	藤戸	三七五
兼平	六二	通小町	二二三	玉井	三八五
千手	七三	小袖曾我	二三一	景清	三九四
紅葉狩	八四	竹生島	二四二	杜若	四〇八
老松	九二	朝長	二四九	二人靜	四一八
賴政	九九	柏崎	二六二	安達原	四二七
井筒	一一〇	阿漕	二七五	賀茂	四三七
三井寺	一一八	志賀	二八四	俊寛	四四七
天鼓	一三〇	鵜	二九二	松風	四五六
白樂天	一四一	大原御幸	三〇二	西行櫻	四六九
實盛	一五〇	梅枝	三一五	浮舟	四七九

脇能 高砂 正月

前シテ 翁　ツレ 嫗　後シテ 住吉明神　ワキ 神主友成

ワキ次第「今を始の旅衣〳〵日も行末ぞ久しき　ワキ詞「抑是は九州肥後の國阿蘇の宮の神主友成とは我事也。我いまだ都を見ず候程に。此度思ひ立ち都に上り候。又よきついでなれば。播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候　道行「旅衣末はる〴〵の都路を〳〵。けふ思ひ立つ浦の浪船路長閑き春風のいく日きぬらん跡末も。いさ白雲のはる〴〵とさしも思ひし播磨がた高砂のうらに着にけり〳〵

シテ ツレ 一聲「高砂の松の春風吹きくれて尾上の鐘も響くなり　ツレ 二ノ句「波は霞の磯

シテサシ打上「誰をかも知る人にせん高砂

かくれ　音こそ潮のみちひなれ

の松も昔の友ならで　過來し世々のしら雪の積り〱て老の鶴

のねぐらに殘る有明の春の霜夜の起るにも松風をのみ聞馴て心

を友と菅莚の思ひをのぶる計なり　下歌　音づれの松にことゝふ浦

小謡　上歌　風の落葉衣の袖そへて木蔭の塵をかゝふよ〱　所は高砂

の〱尾上の松も年ふりて老の波もよりくるや木の下蔭の落

葉かくなるまで命なからへて猶いつまでか生の松それも久しき

名所かな〱

ワキ「里人を相待つ處に老人夫婦來れり　いかに

是なる老人に尋ぬべき事の候　シテ「こなたの事にて候か何事にて

候ぞ　ワキ「高砂の松とは何れの木を申候ぞ　シテ「唯今木陰を清め候

こそ高砂の松にて候へ　ワキ「高砂住の江の松に相生の名あり當所

と住吉とは國をへたてたるに何とて相生の松とは申候ぞ　シテ「仰

の如く古今の序に高砂住の江の松も相生の樣に覺えとありさり

ながら此尉は津の國住吉の者是なる姥こそ當所の人なれ知る事

あらば申さ給へ　ワキ上カヽル「ふしぎや見れば老人の夫婦一所に有りなが

ら遠き住の江高砂の浦山國を隔てすむといふは如何なる事や覽

ツレ上「うたての仰や山川萬里を隔つれ共たがひに通ふ心づかひの妹背の道は遠からず　シテ「先案じても御覧ぜよ。二人上「高砂住の江の松も非情の物だにも相生の名はあるぞかし。ましてや生ある人として。小謡 年久しくも住吉より通ひ馴たる尉と姥は松諸共に此年まで相生の夫婦となるものを　ワキ上「謂を聞けば面白や扨々さきに聞えつる。相生の松の物語を所にいひ置くいはれはなきか　シテ「昔の人の申しは是はめでたき世のためしなり　ツレ上「高砂といふは上代の萬葉集のいにしへの義　シテ「住吉と申すは今此御代に住給ふ延喜の御事

ツレ上「松とは盡ぬことの葉の　シテ「榮は古今相同じと。二人上「御代をあがむるたとへなり　ワキ上「よく〳〵聞けば有難や今こそ不審春の日の　シテ「光やはらぐ西の海の　ワキ「かしこは住の江　シテ「こゝは高砂　ワキ「松もいろそひ　シテ「春も　ワキ「長閑に　上歌 同 小謡「四海波靜にて國も治まる時津風枝をならさぬ御代なれやあひに相生の松こそめでたかりけれげにやあふぎても事も愚かやかゝる世に住める民とて豊なる。君の恵みぞ有難き〳〵　ワキ「猶々高砂の松のめでたき謂委しく御物語候へ　クリ 打カヽル「それ草木心なしとは申せども花實の時をたがへず。

シテサシ「然れども此松の。地下歌 終り迄 陽春の徳をそなへて南枝花はじめてひらく其氣色とこしなへにして花葉時をわかず。同下 よつの時至りても。一千年の色雪のうちに深く又は松花の色十かへりともいへり

シテ下「かゝるたよりを松が枝の。同 ことの葉草の露の玉。心を磨く種となりて

シテ下「生としいける物ごとに。同中 敷島の影によるとかや。

クセ下 然るに長能が言葉にも有情非情の其聲みな歌にもるゝ事なし草木土沙風聲水音まで萬物のこもる心あり春の林の東風にうごき秋の虫の北露になくも皆和歌の姿ならずや中にも此松は萬木に

勝れて十八公のよそほひ千秋の綠をなして古今の色を見ず始皇の御爵にあづかる程の木なりとて異國にも本朝にも萬民これを賞翫す

小謡 シテ上「高砂の尾上の鐘の音すなり 同上 曉かけて。霜はおけども松が枝の。葉色は同じ深みどり立寄る陰の朝夕にかけども落葉の盡きせぬは誠なり松のはの散りうせずして色は猶正木のかづらながき世のたとへなりけるときは木の中にも名は高砂の末代のためしにも相生の松ぞめでたき

地上 ロンギ「げに名を得たる松が枝の〳〵老木の昔あらはして。その名を名のり給へや

上「今は何をか

つゝむべき是は高砂住の江の相生の松の精夫婦と現じ來りたり
地上「ふしぎや扨は名所の松の奇特を顯はして　二人「草木こゝろなけれども　地「畏き代とて　二人「土も木も　同「我が大君の國なればいつ迄も君が代に住吉にまづ行きてあれにて待申さんと夕波の汀なる海士の小舟に打乘りて追風にまかせつゝ沖の方に出にけりや〳〵
ワキ上　待謡　中入「高砂や此浦舟に帆をあげて〳〵月もろ共に出汐の波の淡路の島陰や遠くなるをの沖過ぎて早や住の江につきにけり〳〵
後シテ上　出端「我見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いく世へぬらんむつまし

（瑞垣）と君はしらずやみづがきの久しき世々の神かぐらよるの鼓の拍子を揃へてすゞしめ給へ宮つこたち　地上「西の海あをきが原の浪間より　シテ「あらはれ出し神松の春なれや殘んの雪の朝香がた
上（玉藻）「たまもかるなる岸陰の　シテ「松根によつて腰をすれば　地「千年の綠手にみてり　シテ上「梅花を折つてかうべにさせば　地「二月の雪衣
（影向）におつ　地上　舞打上「有難のやうがうや〳〵月住吉の神遊び御影を拜む
（仕舞）あらたさよ　シテ上「げにさま〳〵の舞姫の聲も澄むなり住の江の松
げに樣々より終りまで
かげもうつるなる青海波とは是やらん　地上「神と君との道すぐに

地「さて萬歳の都の春に行くべくハ　シテ「それハ還城樂の舞

シテ「小忌衣　(腕)　地「さすかひなには悪魔をはらひおさむる手にハ壽福をいたき千秋樂ハ民をなて萬歳樂にハ命をのぶ相生の松風颯々の聲ぞたのしむ／＼

祝小謡　千秋樂より終りまで

二番目
修羅物

田村

三月　前シテ　童子　後シテ　坂上田村丸　ワキ　僧

次第　ワキ「都の都路隔て來て／＼九重の春に急がん

ワキ詞「是ハ東國方より出たる僧にて候我未だ都を見ず候程に此春思ひ立て候

道行　ワキ「頃もはや彌生なかばの春の空／＼影も長閑にめぐる日の霞む其方や音羽山瀧の響も靜なる清水寺に着にけり／＼

ワキ「急ぎ候程に是ハ都清水寺とかや申すげに候是なる櫻の盛と見えて候人を待て委しく尋ねばやと思ひ候

一聲　シテ「おのづから春の手向となりにけり地主權限の花ざかり

サシ　シテ「夫花の名所多しといへ共大悲の光色

そふ故か此寺の地主の櫻にしくはなし。されば大慈大悲の春の花。十悪の里にかうばしく。三十三身の秋の月五濁の水に影清し

下歌 千早振神のお庭の雪なれや

上歌 白妙に雲も霞も埋れて。〳〵何れ櫻の梢ぞと見渡せばやへ一重げに九重の春の空よもの山なみれのづから時ぞと見ゆる氣色かな〳〵

ワキ「いかに是なる人に尋申べき事の候

シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「見申せば美しき玉箒をもち木陰を清め給ひ候は若花守にて御入り候か

シテ「さん候是は此地主權限に仕へ申者なり。いつも花の頃は木陰を清

（御奴）め候程に。花守とや申さん。又みやつことや申べき。何れに由ある者と御覧候へ

ワキ「げに〳〵由ありげに見えて候。先々當寺の御來暦委しく語り給ふべし

シテ「抑も當寺清水寺と申すは。大同二年の御草創坂の上の田村丸の御願なり。昔大和國小島寺といふ所に賢心といへる沙門正身の觀世音を拜まんと誓ひしに。ある時木津川の川上より金色の光さしゝを尋ね登つて見れば一人の老翁あり。彼翁語つていはく我は是行叡居士といへり。汝一人の檀那をまち大伽藍を建立すべしとて東をさして飛去りぬ。されば行叡居士とい

つば。是觀音薩埵の御再誕また檀那をまてと有りしは。是坂の上の
※小謡　上歌 同　田村丸　※今も其名に流れたる清水の。〱深き誓ひも數々に千
手の御手のとり〲樣々の誓ひ普くて國土萬民をもらさじの大
悲の影ぞ有難きげにや安樂世界より今此娑婆に示現して我らが
爲の觀世音あふぐも愚なるべしや〱　ワキ ※「近頃面白き人に參
あひて候ものかな。又見え渡りたるは皆名所にてぞ候らん御教へ
候へ　シテ「さん候皆名所にて候。御尋候へ教申候べし　ワキ「先南に當
つて塔婆の見えて候は。いかなる所にて候ぞ　シテ「あれこそ歌の中

山清閑寺今熊野まで見えて候へ　ワキ「又北に當て入相の聞え候は。
いかなる御寺にて候ぞ　シテ「あれは上見ぬ鷲の尾の寺。や御覽候
へ音羽の山の嶺よりも出たる月のかゝやきて。此地主の櫻にうつ
る氣色。先々是こそ御覽じ事なれ　ワキ上「げに〱是こそ暇おしけれ。
こと心なき春の一時　シテ「げに惜むべし　ワキ「惜むべしや　シテ ワキ 二人 春霄一
※囃子終り迄　刻價千金。花に清香月にかげ　下 ※「げに千金にもかへじと。今この
時かや　同下　あら〱面白の地主の花の氣色やな櫻の木の間にも
（仕舞）クセよりロンギ前迄　る月の雪もふる夜嵐の誘ふ花とつれてちるや心なるらん　クセ中　さ

ぞな名にしおふ花の都の春の空げに時めける粧ひ青楊の影みどりにて風長閑なる音羽の瀧の白糸のくり返しかへしても面白や有難やな地主權現の花の色も異なり 「唯頼め標茅が原のさしも草 我世の中にあらん限りの御誓願濁らじものを清水の緑もさすや青柳のげにも枯たる木なり共花櫻木の粧ひいづくの春もおしなめて長閑き影の有明の天も花に醉へりや面白の春べやあら面白の春べや 「げにや氣色を見るからに唯人ならぬ粧ひの其名いかなる人やらん 「いかに共いさや其名も白雪の跡を

（声替）惜まば此寺に歸る方を御覽ぜよ 「歸るやいづくあしがきのま

（メツみは僞りにし聞）

ぢかき程か遠近の 「たづきも知ぬ山中に おぼつかなくも思ひ給は我行く方を見よやとて地主權現の御前より下るかと見えしが下りせて坂の上の田村堂の軒もるや月のむらどを押あけて内に入せ給ひけり内陣に入せ給ひけり 「夜もすがら散るや櫻の陰に居て 花も妙なる法の場迷ひぬ月の夜と共に此御經を讀誦する 「あら有難の御經やな清水寺の瀧津浪まで一河の流を汲で他生の緣ある旅人に言葉をかわす夜聲

の讀誦是ぞ則ち大慈大悲の觀音擁護の結緣たり　「ふしぎやな
花の光にかゝやきて男體の人の見え給ふはいかなる人にてまし
ますぞ　「今は何をか包むべき人皇五十一代平城天皇の御宇に
ありし坂の上の田村丸。　東夷を平らげ悪魔を鎭め天下泰平の忠
勤たりしも則ち當寺の佛力なり　然るに君の宣旨には勢州鈴
鹿の悪魔を鎭め都鄙安全になすべしとの仰によつて軍兵を調へ。
既に趣く時節に至りて此觀音の佛前に參り祈念をいたし立願せ
しに　「ふしぎの瑞驗あらたなれば。　歡喜微笑の頼みを含んで。

急ぎ凶徒に打立けり　普天の下卒土の中いづく王地にあらざ
るや頓て名にしおふ關の戸さゝで逢坂の山を越ゆれば浦波の粟
津の森やかげろふの石山寺をふし拜み是も淸水の一佛と頼みは
あふに近江路や勢田の長橋ふみならし駒も足並やいさむらん
「既に伊勢路の山近く。　弓馬の道もさきかけんとかつ色見せたる
梅が枝の花も紅葉も色めきて。たけき心はあらかねの土も木も我
大君の神國に本より觀音の御誓ひ佛力といひ神力も猶數々にま
すらをが待つとは知らでさを鹿の鈴鹿のみそぎせし世々迄も思

へば佳例なるべし◎　さる程に山河を動かす鬼神の聲天に響き

(仕舞)千方をすつれほより終り迄

地に滿て萬木青山動搖せりいかに鬼神も慥にきけ昔もさる例あり千方といひし逆臣に仕へし鬼も王意を背く天罰にて千方をすつれば忽ち亡び失しぞかしましてやま近き鈴鹿山◎振さけ見れば伊勢の海〳〵あの〳〵松原村立來つて鬼神の黒雲鐵火を降しつゝ數千騎に身を變じて山の如くに見えたる處に「あれを見よふしぎやな〳〵味方の軍兵の旗の上に千手觀音の光を放て虛空に飛行し千の御手毎に大悲の弓には智惠の矢をはめ

て一度放せば千の矢先雨霰と降かゝつて鬼神の上に亂れ落ればことぐく矢先にかゝつて鬼神の殘らずうたれにけり有難しありがたしや誠に呪咀諸毒藥念彼觀音の力を合せて則ち還着於本人則ち還着於本人の敵の亡びにけり是觀音の佛力なり◎

三番目 鬘物

江口

九月　前シテ里女　後シテ江口ノ君　ツレ遊女　ワキ僧

次第 ワキ「月は昔の友ならば。〳〵世のほかいづくならまし

ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候。我未だ津の國天王寺に參らず候程に。此度思ひ立ち天王寺に參らばやと思ひ候

道行「都をばまだ夜深きに旅立ちて。〳〵淀の川舟行末は。宇どのゝ蘆のほの見えし。松の煙の浪よする。江口の里に着きにけり〳〵

ワキ詞「さては是なる江口の君の舊跡かや。痛はしや其身は土中に埋むといへども。名は留まりて今迄も。昔がたりの舊跡を今見る事の哀さよ。

詞 げにや西行法師この所にて。一夜の宿を借りけるに。あるじの心なかりしかば。世の中をいとふ迄こそかたからめ。

詞 かりのやどりを惜む君かなと詠じけんも。此所にてのことなるべし。あら痛はしや候

シテ女「のう〳〵あれなる御僧。今の歌をば何と思ひよりて口ずさみ給ひ候ぞ

ワキ「ふしぎやな人家も見えぬかたよりも。女性一人來りつゝ。今の詠歌の口ずさみを。いかにと問はせ給ふ事。そも何故に尋ね給ふぞ

女「忘れて年を經しものを。又思ひそむ言の葉の。草の陰野の露の世を。いとふ迄こそかたからめ。假の宿りを惜むとの。其言の葉も恥かしければ。さのみは

惜み參らせざりし其理りをも申さん爲にこれ迄顯れ出たるなり

ワキ「心得ずかりの宿りを惜む君かなと西行法師が詠ぜし跡を唯何となく弔ふ所にさのみは惜まざりにしと理り給ふ御身は偖いかなる人にてましますぞ

女「いやさればこそ惜まぬよしの御返事を申し歌をば何とてか詠じもせさせ給はざるらん

ワキカヽル「げに其返歌の言の葉は世をいとふ

女下歌「人としきけば假のやどに心とむなと思ふばかりぞ心とむなと捨人をいさめ申せば女の宿りにとめまゐらせぬも理りならずや

ワキカヽル上「げに理りなり西行も假の宿りを捨人といひ

女「此方も名におふ色このみの家にはさしも埋木の人知ぬ事のみ多き宿に

ワキカヽル「心とむなと詠じ給ふは

女「捨人を思ふ心なるを

ワキ「唯惜むとの

女「言の葉は

小謡

上歌同「おしむこそ惜まぬ假の宿なるを〳〵などやおしむといふ涙の返らぬいにしへは今とても捨人の世語に心なとゞめ給ひそ

地上ロンギ「げにやうき世の物語きけば姿もたそかれ（黄昏）にかげろふ人はいかならん

女上「たそかれにたたずむ影はほの〴〵と見え隠れなる川ぐま（川隈）に江口の流れの君とや見えん恥かしや

地上「扨は疑ひあら磯の波と消えにし跡なれや

女「假に住こし我宿の　地上「梅の立枝や見えつらん　女「思ひの外に君がきませるや。一樹の陰にや宿りけん。又は一河の流れの水汲てもしろしめされよや。江口の君の幽靈ぞと聲ばかりしてうせにけり〱

ワキ「扨は江口の君の幽靈かりに現れ。我に言葉をかはしけるぞや。いざ吊ひてうかめんと

上歌「いひもあへねばふしぎやな。月すみ渡る河水に。遊女の謡ふ舟遊び。月に見えたる不思議さよ〱

川舟をとめて逢瀬の涙枕。〱うき世の夢を見ならはしの。驚かぬ身のはかなさよ。さよ姫が松浦潟かたしく袖の涙

の唐土舟の名残なり。また宇治の橋姫も。とはんともせぬ人を待つも身の上と哀なり。よしや芳野のよしや芳野の花も雪も雲も涙もあはれ世にあはばや

ワキ「ふしぎやな月すみ渡る水の面に。遊女のあまたうたふ謡色めきあへる人影は。そも誰人の舟やらん　女「何此舟をたが舟とは恥かしながらいにしへの。江口の君の川逍遥の月の夜舟を御覧ぜよ　ワキ「そもや江口の遊女とは。それは去にしいにしへの　女「いや古とは御覧ぜよ月は昔にかはらめや　ツレ女二人「我らもかやうに見え來るを。いにしへ人とはうつゝなや　女「よし〱

何かと宣ふ共　「いゐじや聞かじ　「むつかしや　秋の水。みなぎり落てさる船の　「月も影さす棹の歌　歌へやうたへうたかたのあゐれ昔の懸しさを今も遊女の舟遊び世を渡るひとふしを謡ていざや遊ばん「夫十二因縁の流轉ゐ車の庭に廻るがごとし　「鳥の林に遊ぶに似たり。　前生また前生　「曾て生々の前をしらず　「來世猶來世さらに世々の終りをわきまふる事なし　「或ゐ人中天上の善果をうくといへ共。　顚倒迷妄して未た解脱の種をうゐず　「或ゐ三途八難の惡趣に墮して。　患

にさへられて既に發心のなかだちを失ふ　「然るにわれらたま〳〵受がたき人身を受けたりといへ共。　罪業深き身と生れ。ことにためし少き河竹の流れの女となるさきの世の酬ひ迄思ひやるこそ悲しけれ　紅花の春のあした紅錦繡の山粧ひをなすと見えしも夕の風にさそゐれ紅葉の秋の夕黄纐纈の林色を含むといへ共朝の霜にうつろふ松風蘿月に詞をかゐす賓客も去つて來る事なし翠帳紅閨に枕をならべし妹背もいつのまにかゐへだつらんれよそ心なき草木情ある人倫いづれ哀を遁るべきかくゐ思

小謡　ひ知りながら 女上「ある時は色にそみ貪着の思ひ淺からず。 同　又
ある時は聲をきゝ愛執の心いと深き心に思ひ口にいふ妄語の縁
となるものをげにや皆人は六塵の境に迷ひ六根の罪をつくる事
も見る事きく事に迷ふ心なるべし 地上「おもしろや 女上 序「實相無漏
の大海に五塵六欲の風は吹かねども 打上「隨緣眞如の波のたゝぬ
日もなし〳〵 女下「浪のたちゐも何故ぞ假なる宿に 「心とむ
るゆへ 地上「こゝろとめずはうき世もあらじ 女下「人をも慕はじ
待つ暮もなく 「別路もあらし吹く 地上「花よ紅葉よ月雪のふる

小謡　こともあらよしなや 女下「思へば假の宿 同 思へば假の宿に心と
むなと人をだにいさめし我なり是までなりや歸るとて則ち普賢
菩薩とあらはれ舟は白象となりつゝ光と共に白妙の白雲に打ち
乘りて西の空にゆき給ふ有難くぞおぼゆる有難くこそはおぼゆれ

四番目
略三番
狂女物

班女

七月

シテ　花子　　狂言　宿ノ長者
ワキ　吉田少將　トモ　従者

狂言「か様に候者は美濃國野上の宿の長にて候。扨も我花子と申女を持て候が、過ぎにし春の頃みやこより吉田の何がし殿とやらん申人の東へ下り給ひ候が、此宿に御宿り候ひて彼花子を愛させたまひけるが、扇を取替へて御下り給ひしより、花子扇にながめ入り閨より外に出る事なく候程に、彼人をよび出し追出さばやと思ひ候。さても花子今日よりしてこれには叶ひ候まじ、とく〳〵何方へも御出候へ

シテ下「げにや本よりも定めなき世といひながら、うきふししげき河竹の流の身こそ悲しけれ

下歌同「分け迷ふ行方もしらでぬれ衣、

上歌「野上の里を立出て〳〵、近江路なれど憂き人に別れし袖の露其まゝ消えぬ身ぞつらき〳〵

次第 ワキ三人ツヨク「帰るぞ名残富士の根の〳〵、ゆきて都に語らん

ワキ詞「是は吉田の少將とは我事也。扨も我過ぎにし春の頃東に下りはや秋にもなり候へば、只今都に上り候

道行 ワキ三人ウキ「都をば霞と共に立出て〳〵、しばし程ふる秋風の音白河の關路より又立帰る旅衣、浦山過ぎて美濃の國野上の里につきにけり〳〵

ワキ詞「いかに誰かある急ぐ間是ははや美濃國

野上の宿にて候。此所に花子といひし女に契りし事あり。未だ此所にあるか尋て來り候へ　「畏つて候。花子の事を尋申て候へば。長と不和なる事の候ひて。今は此所には御入なき由申候　「扨は定めなき事ながら。若其花子歸り來る事あらば。都へついての時は申上せ候へとかたく申付候へ。急ぐ間程なく都に着きて候。我宿願の子細あれば。是より直にたゞすへ參らうずるにて候。皆々參り候へ

「春日野の雪間をわけて生出てくる草のはつかに見えし君かも。

よしなき人になれ衣の日を重ね月は行けども世を秋風の便ならては、ゆかりをしらする人もなし。夕ぐれの雲の旗手に物を思ひ、うはの空にあくがれ出て、　身をいたづらになす事を神や佛も憐みて思ふ事をかなへ給へ。夫足柄箱根玉津島貴船や三輪の明神は夫婦男女のかたらひを守らんと誓ひおはします此神々に祈誓せばなどかしるしのなかるべき謹上再拜。　戀すてふ我名はまだき立ちにけり　「人知れずこそ思ひそめしが　「あら恨めしの人心や　「げにや祈りつゝみたらし川に戀せじと誰かいひけんそらごとやされば人心眞すぐなき濁江のすまて頼まば神とてもう

け給ぬ理りやとにもかくにも人知れぬ思ひの露の　置所

（小謡）いづくならまし身のゆくゑ　心だに眞の道に叶ひなば〳〵。
祈らずとても神や守らん我等まで眞如の月の曇らじをしらで程
へし人心衣の玉のありながら恨みありやともすれば猶同じ世と。
祈るなり〳〵　トモ「いかに狂女何とてけふの狂ひぬぞ面白う狂
ひ候へ　女「うたてやなあれ御覧ぜよ今までのゆるがぬ梢と見えつ
れ共風の誘へば一葉も散る也たま〳〵心すぐなるを狂へと仰あ
る人々こそ風狂じたる秋の葉の心も共に亂れ戀のあら悲しや狂

へとな仰ありさむらひそよ　トモ「扨例の班女の扇のば　女「うつゝ
なや我名を班女とよび給ふぞやよし〳〵それもうき人の筐の扇
手にふれてうちおき難き袖の露ふる事迄も思ひぞ出る班女が閨
のうちには秋の扇の色楚王の臺の上の夜の琴の聲　夏はつ
る扇と秋の白露と何れが先に起臥の床冷しや獨寢のさみしき枕
して閨の月をながめん　月重山に隠れぬれば扇をあげてこれ
をたとへ　女「花巾上に散りぬれば。雪をあつめて春をおしむ

（小謡 夕の嵐より總はそふ物な迄）
「夕の嵐朝の雲何れか思ひの妻ならぬ。さみしき夜の鐘の音

鶏籠の山に響きつゝ明なんとして別れを催し 女下「せめて閨もる月だにも。 しばし枕に殘らずして又獨寢になりぬるぞや

クセ 中 翠帳紅閨に枕ならぶる床の上なれしふすまの夜すがらも同穴の跡夢もなしよしそれも同じ世の命のみをさりともといつまで草の露のまも比翼連理のかたらひ其驪山宮の私語も誰か聞傳へて今の世まで漏すらんさるにても我妻の秋より先にかならずと夕の數の重なれどあだし言葉の人心頼めて來ぬ夜のつもれども欄干に立つくしてそなたの空よとながむれば夕暮の秋風あらし山

(仕舞)去にてもより繪にかけるの扇で止め又月なかくしてよりワキ開闕泣

颪野分もあの松をこその音づるれ我待つ人よりの音づれをいつ聞かまし 女上「せめてもの憧の扇手にふれて。 同 風の便と思へども夏もはやすぎの窓の秋風冷やかに吹き落て團雪の扇も雪なれは名を聞くもすさましくて秋風恨ありよしや思へばこれもげにあふは別れなるべし其報ひなれは今さら世をも人をも恨むまじ唯思はれぬ身の程を思ひつゞけて獨居の班女が閨ぞさみしき

地上 繪にかける 女 「月をかくして懐にもちたる扇 地上 打上「とる袖も三

(約束) 重がさね 女下 「其色衣の 地上 「つまのかねこと 女下 「かならずと夕暮

の月日もかさなり「秋風の吹け共おぎの葉の「そよとの便

もきかて「鹿の音虫の音もかれ〴〵の契りあらよしなや

「かたみの扇より〳〵猶うらおもてある物は人心なりけるぞ

や扇とはそらごとやあはでぞ戀はそふ物を〳〵「いかに誰

かある。あの狂女が持ちたる扇見たきよし申候へ「いかに狂女。

あのお輿の内より。狂女の持ちたる扇御覧じたきとの御事にて候

參らせられ候へ「是は人の筐なれば。身をはなさて持ちたる扇

なれ共形見こそ今はあたなれこれなくは。忘るゝ隙もあらましも

のをと思へども。さすが又添ふ心地する折々は扇とるまも惜き物

を人に見する事あらじ「こなたにも忘れがたみの言の葉をい

(扇子)はての森の下つゝじ色に出ずはそれがしも。見てこそしらめ此扇。

「見ては扨何の爲ぞと夕暮の月を出せる扇の繪のかくばかり問ひ

給ふは何のお爲なるらん「何ともよしや白露の草の野上の旅

寢せし契りの秋はいかならん「野上とは〳〵東路の末の松

山涙こえて歸らざりし人やらん「末の松山たつ波の何か恨み

ん契りおく「形見の扇そなたにも「身にそへ持ちしこの扇

（四二）

女「輿の内より。

地 女「取出せば。おりふしたそかれにほの〲見れば夕顔の花を書きたる扇也。此上の惟光に紙燭召して。ありつる扇御覧ぜよ互にそれぞとしられ白雪の扇の妻のかたみこそ妹背のなかの情なれ〱

（四三）

五番目

鵜飼

五月

前シテ 漁翁　ワキ 日蓮上人
後シテ 閻魔王　脇ツレ 従僧

ワキ詞「是は安房の清澄より出でたる僧にて候。われ未だ甲斐の國を見ず候程に。此たび甲斐の國行脚と志して候

上歌 行末いつとしら波の。安房の清澄立出て六浦のわたり鎌倉山　やつれはてぬる旅姿。〱すつる身なれば恥られず一夜假寝の草筵鐘を枕の上に聞くつるの郡の朝立も日たけてこゆる山道を過ていさはにつきにけり〱

（石和）

シテ一聲「鵜舟にともす篝火の。後のやみぢをいかにせん

シテサシ「げにや世の中をうしと思はばすつべきに。其心更に夏河に。鵜つか

ふ事の面白さに殺生をするはかなさよ　詞 傳へ聞く遊子伯陽は月に誓つて契りをなし夫婦二つの星となる今の雲のうへ人も月なきよはをこそ悲み給ふに我はそれにはひきかへ月の夜頃をいとひ闇に成る夜を悦べば　下歌 鵜舟にともす篝火の消えて闇こそ悲しけれ　上歌 つたなかりける身のわざと今は先非をくゆれどもかひも浪間に鵜舟こぐこれ程れしめ共叶はぬ命つがんとていとなむわざの物うさよ／＼　詞 いつものごとく御堂にあがり鵜をやすめうずるにて候や是は往來の人の御入候よ　ワキ「さん候往來

の僧にて候が里にて宿をかり候へば禁制の由申候程に扨此御堂に宿りて候　シテ「げに／＼里にてお宿參らせうずる者は覺えず候　ワキ「扨御身は如何なる人にて渡り候ぞ　シテ「さん候是は鵜つかひにて候がいつも月の程は此御堂にやすらひ月入て鵜をつかひ候　ワキ「扨は苦しからぬ人にて候ぞや見申せば早拔群に年たけ給ひて候がかゝる殺生のわざ勿体なく候あはれ此業を御とまりあつて餘の業にて身命を御つぎ候へかし　シテ「仰尤もにて候へ共若年より此わざにて身命を扶かり候程に今更とまつつべうもなく候

（六四）

鵜ツレ「如何に申候。此人を見て思ひ出したる事の候。此二三ヶ年先に。此河下岩落と申所を通り候ひしに。か様の鵜つかひに行き逢ひ候程に。科の中の殺生の由を申て候へば。げにもとや思ひけん。我屋につれて歸り。一夜けしからずせつして候ひしよ　シテ「扨は其時の御僧にて渡り候か　鵜ツレ「さん候其時の僧にて候　シテ「のう其鵜つかひこそ空しく成て候へ　ワキ「それは何故空しく成て候ぞ　シテ「はづかしながら此業にて空しく成て候。其時の有様語つて聞せ申候べし。跡をとふて御やり候へ　ワキ「心得申候　シテ「抑此いさは河と申は上下三

里が間はかたく殺生禁斷の所也。今仰せ候岩落邊に鵜つかひは多しよな〳〵此所に忍び上つて鵜をつかふ。にくき者のしはざかな。彼を見顯はさんとたくみしに。それをば夢にも知らずして。又ある夜忍び上つて鵜をつかふ。ねらふ人々はつとより。一殺多生の理にまかせ。かれを殺せといひあへり。其時左右の手を合せ。かゝる殺生禁斷の所とも知らず候。向後の事をこそ心得候べけれとて。手を合せ

（七四）

歎き悲しめ共。たすくる人も涙の底に。ふしづけにし給へば。さけべど聲がいてばこそ。

其鵜つかひの亡者にて候　ワキ「言語同斷の

事にては。さらば罪障懺悔に。業力の鵜をつかうて御みせ候へ。跡を
ば懇ろに弔ひ申候べし　シテ「あら有難や。さらば業力の鵜をつか
うて御目にかけ候べし。跡をとふて給り候へ　ワキ「心得申候
シテ「既に此夜も更過ぎて。鵜つかふ頃にも成りしかば。いざ業力の鵜を
つかはん　ワキ上カル「是は他國の物語。死したる人の業により。かく苦しみ
のうきわざを。今見る事のふしぎさよ　シテ「しめる焚松ふり立て
（仕舞）鵜の段うかごよりいかにせんまで
ワキ「藤の衣の玉たすき　シテ「鵜かごを開きとり出し　ワキ「島津巣おろし
あら鵜ども　シテ「此河浪にばつと放せば　同上「面白の有樣や底にも

見ゆる篝火に。驚く魚を追廻し。かづき上げすくひ上げ。隙なく魚
を食ふ時は。罪も報も後の世も。忘れはてゝ面白や　下歌「漲る水のよ
どならば。いけすの鯉やのぼらん。玉島河にあらね共。小鮎さばしる
（小流）せゞらぎに。かだみて魚はよもためじ。ふしぎやな篝火の。もえても
影の暗くなるは。思ひ出でたり月になりぬる悲しさよ。鵜舟のかゞ
り影消えて。闇路に歸る此身の名殘おしさを如何にせん〳〵
ワキ上歌ツヨク「河瀬の石を拾ひあげ〳〵。妙なる法の御經を。一石に一字書きつ
けて。浪間にしづめ弔らはゞなどか。うかまざるべき〳〵

役シテ上(平曲)「夫地獄遠きにあらず眼前の境界悪鬼外になし。そも〳〵かの者若年の昔より江河に漁つて其罪おびたゞし。されば鐵札かずをつくし金紙をよごす事もなく無間の底に墮罪すべかつしを。一僧一宿の巧力に引かれ。急ぎ佛所におくらんと。悪鬼心をやはらげて。鵜舟(弘誓)をぐぜいの船になし法華の御法の助け舟篝火も浮むけしきかな

地上「迷ひの多き浮雲も　シテ「實相の風あらく吹いて　地上「千里が外も雲はれて眞如の月や出てぬらん

(法事より終りまで)地上打上「有難の御事や奈落に沈む悪人を佛所に送り給ふなる其瑞相のあらたさよ　シテ「法華は利益ふか

き故魔道に沈む郡類を救はん爲に來りたり　地上「げに有難き誓ひ(喜美)かな妙の一字はさていかに　シテ「それはほうひの詞にて妙なる法と說かれたり　地「經とはなぞや名づくらん　シテ「それ聖教の都名にて　地「二つもなく　シテ「三もなく　同上「唯一乘の德によりて奈落に沈みはてゝ浮み難き悪人の佛果をえん事は此經の力ならずや

キリ地下(小謡)「是を見彼をきく時は〳〵縱ひ悪人なりとても慈悲の心をさきとして僧依を供養するならば。その結緣に引かれつゝ佛果菩提にいたるべしげに往來の利益こそ他をたすくべき力なれ〳〵

（二五）

脇能 **難波** 二月

前シテ 老翁　ツレ 男　同天女 木華開耶姫　後シテ 王仁　ワキ 臣下

次第 ワキ 三人「山も霞て浦の春。〳〵浪風靜なりけり

ワキ詞「抑是は當今に仕へ奉る臣下也。我三熊野を信じ。毎年としごもり仕候。此度は所願成就し年かへる春にもなり候へば。唯今都に下向仕候

道行 三人上「春立やげに。ものどけき風和の。〳〵濱の眞砂も吹上の。浦傳ひして行く程に。早くも紀路の關越えて。是も都か津の國の。難波の里に着きにけり〳〵

一聲 シテ ツレ「君が代の。ながらの橋もつくるなり。難波の春も幾久し

ツレ 二ノ句「雪にも梅の冬籠り。今は春べの氣色かな

シテ サシ「夫天長く地久しくして。神代の風長閑に傳はり　皇の畏き御代の道廣く。國を惠み民をなでゝ。四方に治る八洲の浪靜に照す日の本の影ゆたかなる時とかや

下歌「春日野に若菜摘みつゝ萬代を

上歌 地「祝ふなる。心ぞしるき曇なき。〳〵天つ日つきの御調物。はこぶちまたや都路の。直なる御代を仰がんと。關の戸さゝで千里迄。あまねく照す日影哉。〳〵

ワキ「如何に是なる老人に尋ぬべき事の候

シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「ふしぎやな諸木こそ多き中に。是なる梅の木陰を立去らずして。陰を清め賞翫し給ふ事不審也。若此梅は名木にて候か

（三五）

（四五）

シテ「御姿を見奉れば都の人にて御座候が此難波の浦において色ことなる梅花を御覧じて名木かとのお尋は御心なきやうにこそ候へ

ツレ上「天大方の春の花木々の盛は多けれ共花の中にも始なれば梅花を花の兄ともいへり

シテ「其上梅の名所〳〵國々所は多けれ共六義の始めのそへ歌にも難波の梅こそ詠れたれ

ツレ「御代も開けし榮花といひ

シテ「あまねき花の佳例といひ

二人「とにもかくにも津の國のこや都路の難波津に名をえて咲くや木の花を名木かとのお尋は事新しき御諚かな

ワキ「げに〳〵難波の梅の事名木やらんと尋しは愚なりける問事かな然れば歌にも難波津に咲くや木の花冬籠り今は春べとさくやこの花の春冬かけてよめる歌の心はいかなるぞ

シテ「それこそ帝をそへ歌の心詞は顯はれたれ難波の御子は皇子ながら未だ位につき給はねば冬咲く梅の花のごとし

ワキ上カヽル「御即位ありて難波の君の位にそなはり給ひし時は

シテ「今こそ時の花のごとく

ワキ上「天下の春をしろしめせば

シテ中「今は春べと咲くやこの

（鷦鷯）

ワキ上「花の盛は大さゝぎの

シテ中「帝を花にそへ歌の

ワキ上「風も治り

春小謡

シテ上「立浪も

上歌同「難波津に咲くやこの花冬籠り〳〵今は春

（五五）

べに匂ひきてふけ共梅の風枝を鳴さぬ御代とかやげにや津の國のなにはの事に至る迄豊かなる世の例こそげに道ひろき治めなれ〱

クリ 地 抑も難波津の歌は帝の御始め又淺香山の言葉は采女のかはらけとり〱なり

（土器）

シテ サシ 「むかし唐國の堯舜の御代にもこえつべし。 同上 万機のまつりごとれたやかにして慈悲の涙四海に普く治めざるに平らか也 下ノ中 「君々たれば臣も亦。 同中 水よく船をうかむとかや 高き屋に登りて見れば煙立つ民のかまどは賑ひにけりと叡慮にかけまくも辱けなくぞ聞えける然れば此君の

代々にためしをひく事もげに有難きみことのり國々に普く三年の御調ゆるされし其年月も極まれば濱の眞砂の數つもりて雪は豐年の御調物ゆるす故にやなか〱いやましにはこぶ御寶の千秋萬歳の千箱の玉を奉る※ 「然れば普き御心の 同上 いつくしみ深うして八島の外迄浪もなくひろき御惠み筑波山のかげよりもしげき御影は大君の國なれば土も木も榮え榮うる津の國の難波の梅の名にしれふ匂ひも四方に普く一花開くれば天下皆春なれや萬代の猶安全ぞめでたき

春小謡 ゆるす故にやより

（八洲）

春小謡 難波の梅よりめでたき迄

ロンギ 地上 げに萬代の春の花〱榮え久

しき難波津の昔語が面白き　シテ上「げに名にしれふ難波津に鳥の一
聲折しもに鳴く鶯の春の曲春鶯囀を奏せん　地上「不思議や御身誰
なればかく心ある花の曲舞樂を奏し給ふべき　ツレ上「我は知ずや此
梅の春年々の花の精　地「今一人の老人は　シテ「今ぞ顯す難波津に
同上 咲くや木の花と詠じつゝ位をすゝめ申せし百濟國の王仁なれや
今もこの花に戲れもゝ囀りの聲たて春の鶯の舞の曲夜もすがら
シヤブシ（下臥）慰め申べしやした臥して待ち給へ花のしたぶしに待ちたまへ
ワキ上歌待謠「見て暮す花のしたぶし更る夜の　月影ともに閑なる氣色に

そみて音樂の花に聞ゆるふしぎさよ　後シテ出端上「誰かいひし春の
色は東より來るといへ共南枝花初て開くこゝの所も西の海に向
ふ難波の春の夜の月雪もすむ浦の浪よるの舞樂は面白や夢ばし
覺し給ふなよ　天女上「是は難波の浦に年をへてひらくる代々の惠を
受くる木の花開耶姫の神靈なり　シテ「我は亦百濟國より此國に渡
り君をあがめ國を守る王仁といつし相人なり　地上ノル打上「むかし仁德の
御宇には御代の鏡の影を寫し　シテ「治まる御代の榮花をなしゝも
地「この花の匂ひ　シテノラズ「またば開くる言の葉のみどり　地上ノル打上「難波の事か

法ならぬ遊び戯れ色々の舞樂おもしろや　天女上　舞「梅が枝に來居る鶯
春かけて　シテ下「鳴け共雪はふるき鼓の苔むして打ちならす〳〵
人もなければ君が代に　地上「かけし鼓も　シテ下「時守の眠り　地上「さむ
るは難波の　シテ「鐘も響き　地「浦はうしほの　シテ「浪の聲々　地「入
江の松風　シテ下「むらあしの葉音　地上「いづれを聞くもよろこびの諫
鼓苔むし難波の鳥も驚かぬ御代なりありがたや　ロンギ地上　神舞打上「あら面白の
音樂や時の調子にかたどりて春鶯囀の樂をば　シテ上「春風と諸共に
花を散してどうと打つ　地「秋風樂はいかにや　シテ「秋の風もろと

(仕舞)あら面白より終りまで

もに浪を響かしどうと打つ　地「萬ぜいらくは　シテ「よろづうつ
地「青海波とはあを海の　シテ「波たて打つは採桑老　地「拔頭の曲は
シテ「かへり打つ　同　入日を招き返す手に〳〵今の太鼓は浪なれば
寄りて打ち返りて打ち此音樂にひかれつゝ聖人御代に又出
て天下を守り治むる天下を守り治むる萬歳樂ぞめでたき〳〵

(番小謡)此音樂により終り迄

二番目　兼平

前シテ　舟人　　後シテ　今井兼平
ワキ　僧

次第 ワキ「始て旅を信濃路や、〳〵、木曾の行衛を尋ねん

ワキ詞「是は木曾の山家より出たる僧にて候。扨も木曾殿は江州粟津が原にて果て給ひたる由承及び候程に、彼御跡を弔ひ申さばやと思ひ。唯今粟津が原へと急ぎ候。

道行 ワキ「信濃路や木曾のかけ橋名にしおふ、〳〵、其跡とふや道のべの草の陰野の假枕夜を重ねつゝ日を添てゆけば程なく近江路や矢橋の浦に着きにけり〳〵

シテ「世の業のうきを身につむ柴舟やたかぬ先よりこがるらん。

ワキ「のう〳〵其船に便船申さうのう

シテ「是は山田矢橋の渡舟にてもなし御覧候へ柴積たる舟にて候程に便船は叶ひ候まじ

ワキ「こなたも柴舟と見申て候へ共折節渡りに舟もなし。出家の事にて候へば別の御利益に舟を渡してたび給へ

シテ「げにも〳〵出家の御身なれば餘の人には變り給ふべし。げに御經にも如渡得船

ワキ上「舟待えたる旅行のくれ

シテ「かゝる折にも近江の海の

シテ ワキ 二人上「矢橋を渡る舟ならばそれは旅人の渡舟なり

小謡

上歌同「是は又浮世を渡る柴舟の〳〵干されぬ袖も水馴棹の見なれぬ人なれど法の人にてましませば船をばいかで惜む

べきとく／＼めされ候へ／＼　ワキ「いかに船頭殿に申べき事の
候見え渡りたる浦山は皆名所にてぞ候らん御教候へ　シテ「さん候
皆名所にて候御尋候へ教申候べし　ワキ「先向ひに當て大山の見え
て候は比叡山候か　シテ「さん候あれこそ比叡山にて候へ麓に山王
二十一社茂りたる峰は八王子戸津坂本の人家迄残なく見えて候
ワキ「扨あの比叡山は王城よりうしとらに當て候よのふ　シテ「中々の事
夫我山は王城の鬼門を守り悪魔を拂ふのみならず　一佛乘の嶺
と申は傳聞く鷲の御山を象れり又天臺山と號するは震旦の四明

の洞をうつせり傳教大師桓武天皇と御心を一つにして延暦年中
の御草創我たつ杣と詠じ給ひし根本中堂の山上迄残なく見えて
候　（波止土區）　ワキ「扨々大宮の御在所ははしどのとやらんもあの坂本のうちに
て候か　シテ「さん候麓に當て少し木深き陰の見へ候こそ大宮の御
在所はし殿にて御入候へ　ワキ「有難や一切衆生悉有佛性如來と聞
く時は我等が身迄も頼もしうこそ候へ　シテ「仰のごとく佛衆生通
ずる身なればお僧も我も隔はあらじ一佛乘の　ワキ「峰には遮那の
梢を併べ　シテ「麓に止觀の海を湛へ　ワキ「又戒定惠の三學を見せ

シテ和吟「三塔となづけ一人の又　一念三千の機を顯はして三千人の衆徒をおき圓融の法も曇なき月の横川も見えたりや扨又麓はさゞ波や志賀辛崎の一松七社の神輿の御幸の梢なるべしさゞ波の水馴棹こがれゆく程に遠かりし向ひの浦浪の粟津の森は近くなりてあとは遠きさゝ波の昔ながらの山櫻は青葉にて面影も夏山のうつりゆくや青海の柴舟のしば〳〵も暇ぞ惜きさゞ波のよせよ〳〵磯ぎはの粟津に早く着にけり〳〵　ワキ「露をかたしく草莚〳〵日も暮れ夜にもなりしかば粟津の原の哀世のなき陰いざや弔はん〳〵

後シテ一聲上「白刃骨を碎く苦み眼睛を破り紅波楯を流す粧ひ胡簶に殘花を亂す　一聲上「雲水の粟津の原の朝風に　地上「鬨つくりそふ聲々に　シテ下「修羅のちまたは騷がしや　ワキ打上「ふしぎやな粟津の原の草枕に甲冑を帶し見え給ふはいか成人にてましますぞ　シテ「おろかと尋給ふ物哉御身これ迄來り給ふも我なき跡をとはん爲の御志にてましまさずや兼平是迄參りたり　ワキ「今井の四郎兼平は今は此世になき人也偖は夢にてあるやらん　シテ「いや今見る夢のみか現にもはやみなれ棹の舟にて見みえし物語早くも忘れ

給へりや　ワキカヽル「そもや舟にて見みえしとハ矢橋の浦の渡守の
シテ「其舟人こそ兼平が現に見みえし姿なれ　ワキカヽル「さればこそ始より樣
ある人と見えつるが扨ハ昨日の舟人ハ　シテ「舟人にもあらず
ワキ「漁夫にも　シテ「あらぬ　上歌同「武士の矢橋の浦の渡守矢橋の浦の渡守
と見えしハ我ぞかし同じくハ此舟を御法の舟に引かへて我を又
かの岸に渡てたばせ給へや　クリ地「げにや有爲生死のちまた來て去
る事早し老少もつて前後不同夢幻泡影何れならん　シテサシ「唯是槿花
一日の榮　同下「弓馬の家にすむ月のわづかに殘るつハものゝ七騎

と成て木曾殿ハ此近江路に下り給ふ　シテ下「兼平瀬田より參りあひ
て　同上「又三百餘騎に成ぬ　シテ上「其のち合戰度々にて又主從二騎に
うちなさる　同下「今ハ力なしあの松原に落行きて御腹召されいへと
兼平勸め申せば心細くも主從二騎粟津の松原さして落ち給ふ
クセ下「兼平申やう後より御敵大勢にて追かけたり防矢仕らんとて駒の
手綱を返せば木曾殿御諚ありけるハ多くの敵を逃れしも汝一所
にならばやの所存ありつる故ぞとて同じく返し給へば兼平又申
やうこハ口惜き御諚哉さすがに木曾殿の人手にかゝり給ハん事

末代の御恥辱唯御自害あるべし今井もやがて參らんとの兼平に
諫められ又引返し落給ふ扨其後に木曾殿の心細くも唯一騎粟津
の原のあなたなる松原さして落給ふ　シテ上「頃は睦月の末つかた
同（冴）「春めきながらさへかへり比叡の山風の雲ゆく空もくれはとりあ
（呉服）やしや通路の末しら雪の薄氷深田に馬をかけ落し引け共あがら
ず打て共ゆかぬ望月の駒の頭も見ればこそこは何とならん身の
果せん方もなくあきれはて此まゝ自害せばやとて刀に手を掛給
ひしがさるにても兼平が行へいかにと遠方の跡を見返り給へば

シテ上「いづくより來りけん　同　今ぞ命のつき弓の矢一つ來て内甲にから
（遠近）りと射る痛手にてましませばたまりもあへず馬上よりをちこち
の土となる所は爰ぞ我よりも主君の御跡を先吊ひてたび給へ
ロンギ　地上　げに痛はしき物語兼平の御最期は何とかならせ給ひける　シテ上「兼
（仕舞　兼平より終りまで）平はかくぞとも知らで戰ふ其隙にも御最期の御供を心にかくる
ばかり也　地上「扨其後に思はずも敵の方に聲立て　シテ「木曾殿討た
（呼）れ給ひぬと　地「よばはる聲を聞しより　シテ「今は何をか期すべきと
地「思ひ定て兼平は　シテ「是ぞ最期の廣言と　地「鐙踏ばり　シテ「大音あ

げ木曾殿の御内に今井の四郎兼平と名乘かけて大勢に割て入れば本より一騎當千の秘術を顯し大勢を粟津の汀に追つめて磯うつ浪のまくり切り蜘手十文字に打破り驅通て其後自害の手(貫)本よとて太刀を銜へつゝ逆まに落てつらぬかれうせにけり兼平が最後のしぎ目を驚かす有樣也〳〵

三番目　千手　三月　シテ 千手の前　ツレ 重衡　ワキ 狩野介宗茂

ワキ詞「是は鎌倉殿の御内に狩野の介宗茂にて候偖も相國の御子重衡の卿は此度一谷の合戰に生捕れ給ひ候を某預り申て候朝敵の御事とは申ながら頼朝痛はしく思召されよく痛はり申せとの御事にて昨日も千手の前を遣はされて候彼千手の前と申は手越の長が娘にて候が優にやさしく候とて御身近く召し使はれ候を遣はされ候事誠に有難き御心ざしにて御座候今日は又雨中御つれ〴〵酒を進め申さばやと存候

次第　シテ女　ツレ「琴の音添へて音づる〳〵是や

あづまやなるらん

サシ「それ春の花の樹頭に榮しも。秋の月の水底に沈むも。世のはかなさの有樣を見ても哀や重衡の。其古へは雲の上。かけても知ぬ身のゆくへ涙に漂ひ舟に浮きさらばよるべのよそならでありしに返る有樣かな。下歌 都にたにも留めぬ御涙なるを 上歌 陸奥の忍ぶに堪へぬ雨の音。〳〵降りすさみたる折しもは思ひの露も散々に心の花もしを〳〵としをるゝ袖の色までもけふの夕のたぐひかな〳〵

ワキ「誰にて渡り候ぞ　女「千手の前が參りたる由それ〳〵御申候へ　女「いかに案内申候はん

ワキ「暫く御待ち候へ御機嫌をもつて申さうずるにて候　ツレサシ「身は是槿花一日の榮命は蜉蝣の定なきに似たり。心は蘇武が胡國に捕はれ。岩窟の内にこめられて君邊を忘ぬ心ざし。夫はやうりがはかりことにて。敵を亡ぼし舊里に歸る我はいつとなく敵陣にこめられて。るいせつの責をうくるしらずけふや限りならん。あら定なや候

（やうりーは李陵の誤ならずや不明さあり　（縲絏）

ワキ「いかに申上候。千手の御參りにて候　ツレ「唯今はなにの爲にて候ぞ。よし〳〵何事にてもあれ今日の對面はかなふまじきと申候へ

ワキ「畏て候。いかに申候。御參りの由申て候へば。何と思召候やらんけふ

の御對面は叶ふまじき由仰出されて候　女「是も私にあらず。頼朝よりの御諚にて。琵琶琴をもたせて参りたり。此由重ねて御申候へ

ワキ「御諚の趣申て候へば。是も私にあらず。頼朝よりの御諚にて。琵琶琴もたせて参りたり。よし〳〵御憚りはさる事なれ共唯こなたへと請ずれば

女カル「其時千手立よりて

＊小謡

上歌同「妻戸をきりゝと押しひらく。みすの追風匂ひくる花の都人には。はづかしながら見みにんげにや東の果し迄。人の心の奥深き。其情こそ都なれ。花の春紅葉の秋。たが思出となりぬらん＊

ツレ「いかに千手の前。昨日白地に申つる出家の御暇の事きかまほしうこそ候へ

女「さん候其由申て候へば。朝敵の御事なるを私として。出家を許し申さん事。思ひもよらずとこそ候ひつれ。わらはも御心の内。押しはかり参らせて。いか程こま〴〵と申て候へ共。かひなき出家の御望み。痛はしうこそ候へ

ツレ「口惜や我一谷にていかにもなるべき身の生捕れ。今は東の果迄も。か様に面をさらす事。前世の報ひといひながら又思はずも父命により。佛像を亡ぼし人壽をたちし現當の罪を果す事前業より猶はづかしうこそ候へ

女カル上「げに〳〵是は御理りさりながら。かゝる例は古

〽今に多き習ひと聞く物を獨とな歎き給ひそとよ　ツレ「げによく
慰め給へ共類ひはあらじうき身の果　女「昨日は都の花と榮へ
ツレ「けふは東の春に來て　女「うつり變れる　ツレ「身の程を　上歌同「思へ唯
世は空蟬の唐衣〳〵きつゝ馴にし妻しある都の雲井を立離れ。
遙々きぬる旅をしぞ思ふ衰へのうき身の果ぞ悲しき水ゆく川の
八橋やくもでに物を思へとはかけぬ情の中々に馴るゝや恨みなる
らん〳〵　地上「今日の雨中の夕の空御つれ〳〵を慰めんと樽を
抱きて參りつゝ既に酒宴を始んとす　女「千手も此由見るよりも。

御酌に立て重衡の御前にこそ參りけれ　ツレ「今はいつしか憚りの。
心ならずに思はずも手まづさへぎる盃の心ひとつに思ふ思ひ
ワキ上「夫々いかに何にても御肴にとすゝむれば　女「其時千手取あへず。
羅綺の重衣たる情なき事をきふにねたむ　三人下「只今詠じ給ふ朗詠
は忝けなくも北野の御作此詩を詠ぜばきく人迄も守るべしとの
御誓なり　ツレ下「さりながら重衡は今生の望なし　唯來世の便こそ
きかまほしけれと宣へば　女下「わらは仰をうけたまはり十惡とい
ふとも引攝すと　地上「朗詠してぞかなでける　打上「扨もかの重衡は。

相國の末の御子とは申せ共、兄弟にも勝れ一門にもこえて父母の寵愛限りなし 「され共時うつり平家の運命こと〴〵く 月の夜すがら聲たて〳〵なくやをしかの津の國の生田の川に身をすて〻防ぎ戰ふと申せども 「森の下風木の葉の露 おとされけることこそ哀なれ （仕舞）キリより前の詰めまで 今は梓弓よし力なし重衡もひかんとするにいづ方も網を置たる如くにて逃れかねたる淀鯉の生捕れつ〻ありてうき身をうろくづの其まゝに沈みも果てずして名をこそ流せ川越の重房が手に渡り心の外の都入り 「げにや世の中の 定

なきかな神無月時雨降りおく奈良坂や衆徒の手にわたりなばとにもかくにも果てはせて又鎌倉に渡さるゝ爰はいづくぞ八幡の雲井の都いつか又三河の國や遠江足柄箱根うちすぎて明もやすらん星月夜鎌倉山に入りしかばうき限りぞと思ひしになるれは爰も忍び音にあわれ昔を思ひ妻の燈火暗うして數行虞氏がなんだの雨さへしきる夜の空 「四面に楚歌の聲のうち 何とか返す舞の袖思ひの色にや出ぬらん涙を添て廻らすも雪のふる枝の枯てたゞに花さく千手の袖ならばかさねていざやかへさん

地下「忘れめや　女上「一樹の陰や一河の水　地上「皆是他生の縁といふ白拍子を歌ひける　「其時重衡興に乗じ〳〵琵琶を引よせ弾じ給へばまたたま琴の絃合に　女下「合せてきけば　地上「峰の松風通ひきにけり琴を枕の短夜のうたゝね夢も程なくしのゝめもはの〳〵と明わたる空の　女下「あさまにやなりぬべき　上同　あさまにや　上同　なりなんと酒宴をやめ給ふ御心のうちぞ痛はしき　かくて重衡勅により〳〵又都にとありしかばものゝふ守護し出給へば　女上　詞「千手も泣く〳〵立出て　何なか〳〵のうき契りはやきぬ〳〵に

引はなるゝ袖と袖との露なみだげに重衡のありさま目もあてられぬけしきかな〳〵

五番目

紅葉狩

九月

前シテ 美女　後シテ 鬼女
ツレ 侍女 三 五人　ワキ 平維茂
トモ 從者

次第 女 シテ 同 ツレ 「時雨を急ぐ紅葉狩。〳〵深き山路を尋ん

シテ 女 「是は此あたりに住む女にて候

女同 「げにやながらへて浮世に住むとも今ははや誰白雲の八重葎茂れる宿のさみしきに人こそ見えね秋の來て庭のしら菊うつらふ色も憂身のたぐひと哀なり

シテ 女 下 「餘りさみしき夕まぐれ。しぐるゝ空を詠めつゝ四方の梢もなつかしさに

下歌 女同 伴ひ出る道のべの草葉の色も日に添て

※小謡 上歌 女同 下紅葉夜のまの露や染めつらん。〳〵朝の原は昨日より色深きくれなゐを分行く方の山ふ

かみげにや谷河に風のかけたるしがらみは流れもやらぬ紅葉を渡らば錦中絶えんと先木の本に立よりて四方の梢を眺めて暫く休み給へや

※ワキ 一聲 「面白や頃は長月廿日あまり四方の梢も色々に錦を色どる夕時雨ぬれてや鹿の獨鳴く聲をしるべの狩場のすゑ。

トモ 一聲 げに面白き氣色かな

「明ぬとて野邊より山にいる鹿の跡吹き送る風の音に駒の足なみいさむなり

※打上 上歌 ますらをが。やたけ心のさ

※小謡 （大丈夫）マスラヲ （彌猛）ヤタケ （鹿垣）シガキ

梓弓。〳〵いる野の薄露分て行衛も遠き山陰のしがきの道のさかしきに落くる鹿の聲すなり風のゆくゑもこゝろせよ〳〵 ※

ワキ「いかに誰かある　トモ「御前に候　ワキ「あの山陰に當て人影の見え候。候。いかなる者ぞ名を尋て來り候へ　トモ「畏て候。名を尋ねて候へば。やごとなき上﨟の。幕打廻し屏風をたて。酒宴なかばと見にて候程に。慇に尋て候へば。名をば申さず。唯さる御方と計り申候　ワキ「あらふしぎや。此あたりにて左様の人こそ思ひもよらず候。よし誰にてもあれ上﨟の。道の邊りの紅葉狩。殊更酒宴のなかばならば。かた〳〵乗りうち叶ふまじと　上歌同「馬よりおりて沓をぬぎ。〳〵。道を隔て山陰の。岩のかけぢを過ぎ給ふ。心づかひぞたぐひなき。〳〵

シテ女上「げにや數ならぬ身程の山の奥にきて。人こそ知らじとうちとけて。獨眺むる紅葉ばの。色見えけるかいかにせん　ワキ上「我こそ誰共しらま弓。唯やごとなき御事に。恐れて忍ぶ計り也　女上「しのぶもぢずり誰ぞとも。しらせ給はぬ道のべの。便に立より給へかし　ワキ「思ひよらずの御事や。何しに我をばとめ給ふべきとさらぬやうにて過行けば　女「あら情なの御事や。一村雨の雨宿り　ワキ「一樹の陰に　女「立よりて　同上「一河の流をくむ酒を。いかでか見すて給ふべきと恥かしながらも袂にすがり留むれば。さすが岩木にあらざれば。心弱くもたち歸る。

（上歌）處は山路の菊の酒何かは苦しかるべき　げにやこけいを出し
古へも心ざしをば捨難き人の情の　盃　の深き契りの例とかや

サシ女（囃子）林間に酒を煖めて紅葉をたくとかや。げに面白や處から巖の上
の苔莚かたしく袖も紅葉衣のくれなゐ深き顔ばせの　「此世の
人とも思はれず。胸うち騒ぐ計りなり　さなきだに人心亂る
るふしは竹の葉の露ばかりだにうけじとは思ひしかども　盃に。
（仕舞）向へば變る心哉されば佛も戒めの道は様々多けれど殊に飲酒を
破りなば邪婬妄語も諸共に亂心の花かづらかゝる姿は又世にも。

類ひあらしの山櫻よその見る目もいかならん　女上「よしや思へば
是とても。前世の契り淺からぬ深き情の色見えてかゝる折しも
道のべの草葉の露のかごとをもかけて頼む行末を契るもはか
なうちつけに人の心もしら雲の立わづらへる氣色かなかくて時
刻も移りゆく雲に嵐の聲すなり散るかまさきの葛城の神の契り
のよるかけて月の盃さす袖も雪を廻らす袂かなたえず紅葉

女上 ワカ 中舞「絶ず紅葉青苔の地　打上 絶ず紅葉青苔の地。又是涼風暮行く空に雨
うち灑ぐ夜嵐の物すさましき山陰に月まつ程のうたゝねにかた

しく袖も露深し。夢はし覺し給ふなよ。〈〈　「あら淺ましや我ながら無明の酒の醉心まどろむ隙もなき中に。あらたなりける夢の告と「驚く枕に雷火亂れ。天地も響き風ぞおこちのたづきも知らぬ山中にれはつかなしや恐ろしや　ふしぎや今までありつる女〈〈とりどり化生の姿を顯はし或は巖に火焔を放ち。又は虛空に焔をふらし。咸陽宮の煙の中に。七尺の屏風の上に猶餘りて其たけ。一丈の鬼神の角はかはく眼は日月面をむくべき樣ぞなき

「維茂少しも騷がずして。　維茂少しもさはぎ給はず南無や八幡

大菩薩と。心に念じ劍をぬいて待ちかけ給へば。微塵になさんととんでかゝるを飛びちがひむずとくみ鬼神のまんなかさし通す所を頭をつかんであがらんとするを切りはらひ給へば劍に恐れて巖へのぼるをひきおろしさし通し通し忽ち鬼神を從へ給ふ威勢の程こそおそろしけれ　※

脇能　**老松**　正月

前シテ　翁　後シテ　老松の靈
ツレ　男　ワキ　梅津の某

次第　ワキ　ツヨク「げに治まれる四方の國。〳〵關の戸さゝで通はん　ワキ詞「抑も是は都の西梅津の何某とは我が事也。我北野を信じ。常に歩みをはこび候處に。或夜の靈夢に。我を信ぜば筑紫安樂寺に參詣申せとあらたに御靈夢を蒙りて候間只今九州に下向仕候　道行「何事も心にかなふ此時の。〳〵ためしもありや日の本の國豊なる秋津洲の。浪も音なきよつの海。こま唐土も殘りなき。御調の道の末こゝに。安樂寺にも着にけり〳〵

シテ　ツレ　二人「梅の花笠春もきて。縫ふてふ鳥の梢かな

ツレ　二ノ句「松の葉色も時めきて。　二人「十かへり深き緑かな　シテ　サシ「風を遂つてひろかに開く年の葉守の松の戸に。春を迎へて忽ちにうるおふ四方の草木迄。神の惠みに靡くかと。春めき渡る盛かな　下歌「歩みを運ぶ宮寺の光のどけき春の日に　上歌「松が根の岩間を傳ふ苔むしろ。〳〵敷島の道迄もげに末ありや此山のあまぎる雪のふる枝をも猶惜まるゝ花盛手折やすると守る梅の花垣いざやかこはん梅の花垣をかこはん　ワキ「いかにこれなる老人に尋申べき事の候　シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ　ワキ「聞及びたる飛梅とは何れの木を

申候ぞ　ツレ「あら事も愚や我等は唯。紅梅殿とこそあがめ申候へ
ワキ「げに／＼紅梅殿とも申べきぞや。かたじけなくも御詠歌により。今
神木となり給へば。あがめても猶あきたらずこそ候へ　シテ「扨こな
たなる松をば。何とか御覧じ分られて候ぞ　ワキ「げに／＼是も垣ゆ
ひまはし御しめをひき。誠に妙なる神木と見えたり　いか様是は
老松の　シテ「おそくも心得給ふもの哉。二人 紅梅殿は御覧ずらん色も
若木の花守迄も華やか成に引かへて　下歌 もる我さへに老が身の。
影ふるびたるまつ人の翁さびしき木のもとを老松と御覧ぜぬ神

慮もいかゞ恐ろしや　ワキ「猶々當社の謂委く御物がたり候へ
シテ サシ「先社壇の躰を拜み奉つれば北に峨々たる青山あり。同 朧月松閣の
中に映じ南に寂々たる瓊門あり斜日竹竿のもとにすけり　シテ 下「左
に火焔の輪塔あり　同 翠帳紅閨の粧ひ昔を忘ず。右に古寺の舊跡あ
り晨鐘夕梵の響絶ゆることなし　げにや心なき草木なりと申
せ共。かゝる浮世の理りをば知るべし知るべし諸木の中に松梅は。
殊に天神の御自愛にて紅梅殿も老松も皆末社と現じ給へりされ
ば此二つの木は我朝よりも猶漢家に德を顯はし唐の帝の御時は。

國に文學盛なれば花の色をまし匂ひ常より優りたり文學すたれ
ば匂ひもなく其色も深からず扨こそ文を好む木なりけりとて梅
をば好文木とは附けられたれさて松を大夫といふ事は秦の始皇
の御狩の時天俄にかき曇り大雨頻にふりしかば帝雨を凌がんと
春小謡 此松より又は中入まで
小松の陰により給ふ此松俄に大木となり枝をたれ葉を並べ木の
間すきまを塞ぎて其雨を漏さゞりしかば帝大夫といふ爵を贈り
給ひしより松を大夫と申なり 上「かやうに名高き松梅の 花も
千世迄の行末ひさに御垣守守るべし／＼や神はこゝも同じ名の

上 天満空もくれなゐの花も松ももろともに萬代の春とかや千世萬
代の春とかや 上歌 ワキ 中入待謡 嬉しきかなやいさゝらば此松陰に旅居
して風も嘯く寅の時神の告をも待ちて見ん／＼ 出端 後シテ 上「いかに紅
（客人）梅殿今夜のまれ人をば何とか慰め給ふべき 地「げにめづらかに
春もたち シテ「梅も色そひ シテ上「松とても シテ上「名こそ老木の若緑
地「空すみ渡る神かぐら シテ上「歌をうたひ舞をまひ 地「舞樂を供ふる
宮寺の聲もみちたるありがたや 舞 シテ上「さす枝の／＼ 梢は若木の
花の袖 シテ下「是は老木の神松の 同下 是は老木の神松の千代に八千

代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで シテ「苔のむすまで松竹

(地)つるかめの 打上 キリ「よはひをさづくるこの君の行末まもれと我神詫

(仕舞)のつげをしらする松風も梅も久しき春こそめでたけれ

二番目 修羅物

頼政

五月 前シテ 老人 ワキ 僧 後シテ 源三位頼政

ワキ詞「是は諸國一見の僧にて候。我此程は都に候ひて洛陽の寺社殘りなく拜み廻りて候。又是より南都に參らばやと思ひ候 道行「天雲の稻荷の社伏し拜み〳〵猶行末は深草や木幡の關を今越て伏見の澤田見え渡る水の水上尋ねきて宇治の里にも着にけり〳〵

ワキ カヽル「げにや遠國にて聞及びにし宇治の里山の姿川の流れ遠の里橋の氣色見所多き名所かなあれ里人の來り候へかし 詞 シテ「のう〳〵

御僧は何事を仰せ候ぞ ワキ「是は此所始て一見の者にて候。此宇治の

の里において名所舊蹟殘りなく御教へ候へ　シテ「所には住み候へども賤しき宇治の里人なれば名所とも舊蹟ともいさ白浪の宇治の川に舟と橋とは有ながら渡りかねたる世の中にすむばかりなる名所舊蹟何とか答へ申べき　ワキ「いや左樣には承り候へ共勸學院の雀は蒙求を囀るといへり所の人にてましませば御心にくうこそ候へ先喜撰法師が住みける庵はいづくのほどにて候ぞ

シテ「さればこそ大事の事をお尋あれ喜撰法師が庵は我庵は都のたつみ鹿ぞすむ　世を宇治山と人はいふ也人はいふなりとこそ主だ

にも申候へ尉はしらず候　ワキ「またあれに一村の里のみえて候は槇の島候か　シテ「さん候槇の島とも申又宇治の河島とも申あり

ワキ上「是に見えたる小島が崎の　シテ「名にたちばなの小島が崎　ワキ「向ひに見えたる寺はいか樣惠心の僧都の御法を說し寺候な　シテ「のう〳〵旅人あれ御覽ぜよ　上歌「名にも似ず月こそ出れ朝日山。山吹の瀨に影見えて雪さしくだす島小舟山も川もおぼろ〳〵として是非をわかぬ氣色かなげにや名にしおふ都に近き宇治の里きゝしに優る名所かな〳〵　シテ「いかに申候この所に平等院と

申御寺の候を御覧ぜられて候か　ワキ「不知案内の事にて候程に。未見ず候御教候へ　シテ「此方へ御出候へ。是こそ平等院にて候へ。又是成は釣殿と申て。面白き所にて候よく／＼御覧候へ　ワキ「げに／＼面白き所にて候。又是なる芝を見れば。扇の如く取り残されて候は。何と申たる事にて候ぞ　シテ「さん候此芝について物語の候語て聞せ申候べし。昔此所に宮軍の有しに。源三位頼政合戦に打負け給ひ。此所に扇をしき自害し果給ひぬ。されば名将の古跡なればとて。扇のなりに取残して。今に扇の芝と申候　ワキ上「痛はしやさしも文武に

名を得し人なれ共跡は草露の道のべとなつて行人征馬のゆくゑの如しあら痛はしや候　シテ「げによく御弔ひ候物かな。しかも其宮軍の月も日も今日に當て候はいかに　ワキ「何と其宮軍の月も日も今日に當りたるとや　シテ下「か様に申せば我ながらよそにはあらず旅人の草の枕の露の世に姿見えんと來りたり現となと思ひ給ひそ

上歌 とよ　夢の浮世の中宿の／＼。宇治の橋守年をへて。老の涙も打渡す遠方人に。物申我頼政が幽靈と名のりもあへず失せにけり

中入　ワキ「さては頼政の幽靈假に顯れ。我に詞をかはしけるぞや。

上ウタ「いざや御跡弔ひんと。思ひよるべの涙枕。〳〵。汀も近し此庭の
扇の芝を片敷て。夢の契をまたふよ〳〵 後シテ上一聲「血ひ涿鹿の河とな
つて。紅波楯を流し。白刃骨を砕く。世を宇治川の網代の波。あら閻浮
戀しや。伊勢武者ひ皆緋威の鎧きて。宇治の網代にかゝりけるかな。
うたかたの。哀はかなき世の中に 地「蝸牛の角の。あらそひも
シテ上「はかなかりける心かな。あら貴の御事や。猶々御經讀給へ ワキカヽル上「ふし
ぎやな法體の身にて甲冑を帯し。御經よめと承まひるひ。いかさま
聞つる源三位の。其幽靈にてましますか シテ「げにや紅ひ園生に植

ても隱なし。名のらぬさきに。頼政と御覽ずるこそ恥かしけれ。唯々
御經よみ給へ ワキカヽル上「御心易く思召せ。五十展轉の功力だに成佛まさ
に疑ひなし。ましてや是ひ直道に シテ「弔ひなせる法の力 ワキ「あひ
にあひたり所の名も シテ「平等院の庭の面 ワキ「思ひ出たり シテ「佛
在世に 上歌同「佛の說し法の場。〳〵。爰ぞ平等大會の。功力に頼政が。
佛果を得んぞ有がたき シテ上「今ひ何をか包むべき。是ひ源三位頼政。
執心の涙に浮き沈む。因果の有樣あらひすなり 同サシ「抑も治承の夏
の頃。よしなき御謀叛を勸め申し。名も高倉の宮の内。雲井のよそに

有明の月の都を忍び出て「うき時しもに近江路や　三井寺さして落ち給ふ　さる程に平家は時を廻らさず數萬騎のつはものを關の東に遣はすときくや音羽の山續く山科の里近き木幡の關をよそに見て爰ぞうき世の旅心宇治の河橋打渡り大和路さして急ぎしに「寺と宇治との間にて。關路の駒のひまもなく宮は六度まで御落馬にて煩はせ給ひけり是はさきの夜御寢ならざる故なりとて平等院にして暫く御座を構へつゝ宇治橋の中の間引離し。したは河波うへにたつも共に白旗を靡かしてよする敵

※床几の形～寺と宇治さより終り出

を待居たり　※「さる程に源平の兵宇治川の南北の岸に打ち望み。

※拍吟

鬨の聲矢叫びの音浪に類へておびたゝしし橋の行桁を隔てゝ戰ふ。味方には筒井の淨妙一来法師敵味方の目を驚かす。かくて平家の大勢橋はひいたり水は高しさすが難所の大河なれば左右なふ渡すべきやうもなかつし處に田原の又太郎忠綱と名乘て宇治川の先陣我なりと名のりもあへず三百餘騎　くつばみを揃へ河水に。すこしもためらはずむれゐる村鳥の翅を並ぶる羽音もかくやと。白浪にざつ〳〵とうち入れて浮ぬ沈みぬ渡しけり「忠綱つは

（轡）

ものを下知して曰く。（同）水の逆巻く所をば岩ありと知るべし弱き馬をば下手にたてゝ。強きに水を防がせよ。流れん武者には弓筈をとらせ。互に力を合すべしと。唯一人の下知によつてさばかりの大河なれ共（扇抜いて）一騎も流ず此方の岸に。おめいてあがれば味方の勢は我ながら踏もためず半町計り覚えずしさつてきつさきを揃へて。爰を最後と戦ふたりさる程に入乱れ。我も〳〵と戦へば（シテ上）「頼政が頼みつる。（同）兄弟の者もうたれければ（シテ）「今は何をか期すべきと（シテ下）「唯一すぢに老武者の（同）「是までと思ひて〳〵平等院の庭の面

是なる芝の上に扇を打敷き鎧ぬぎ捨て座を組て刀を抜きながら。さすが名を得し其身とて（シテ上）「埋木の花咲く事もなかりしに。身の成果は哀なりけり。（同）跡訪給へ御僧よ。かりそめながら是とても。他生の種の縁に今。扇の芝の草の陰に。帰るとて失にけり立帰るとて失にけり

三番目 鬘物　**井筒**　九月　前シテ 里の女　ワキ 僧　後シテ 井筒女

ワキ詞「是ハ諸國一見の僧にて候。我此程ハ南都七堂に參りて候。又是より初瀬に參らばやと存候。是なる寺を人に尋て候へば在原寺とかや申候程に。立寄り一見せばやと思ひ候。上 扨ハ此在原寺ハ古へ業平（石上）紀の有常の息女夫婦住給ひしいその上なるべし風吹ば沖つ白浪龍田山と詠じけんも此所にての事なるべし 下歌 昔語の跡とへば。其業平の友とせし紀の有常の常なき世妹背を懸て弔ハん〳〵

次第女（閼伽）「暁ごとのあかの水。〳〵月も心やすまずらん。　さなきだに物の淋しき秋の夜の。人め稀なる古寺の。庭の松風更過ぎて。月も傾く軒端の草。忘れてすぎし古へを。忍ぶ顔にていつ迄かまつ事なくてながらへん。げに何事も思ひでの。人にハ殘る世の中かな 下歌 唯いつとなく一筋に頼む佛の御手の糸導き給へ法の聲 上歌 迷ひをも。照させ給ふ御誓ひ〳〵。げにもと見えて有明の。行ゑハ西の山なれど眺ハ四方の秋の空松の聲のみきこゆれども嵐ハいづくとも。定めなき世の夢心何の音にかさめてまし〳〵

ワキ「我此寺にやすらひ。心をすます折ふし。いとなまめける女性庭の板井を結びあ

（二一）

げ花水とし。是なる塚に廻向の氣色みえ給ふは。いかなる人にてましますぞ　女「是は此あたりに住む者也。此寺の本願在原の業平は。世に名をとめし人なり。されば其跡の驗も是なる塚の陰やらん。わらはも委くはしらず候へ共。花水を手向け御跡を弔ひまいらせ候

ワキ「げに〳〵業平の御事は。世に名をとめし人なりさりながら。今は遙に遠き世の。昔語の跡なるを。しかも女性の御身として。か樣に弔ひ給ふ事。其在原の業平に。いかさま故ある御身やらん　女「故ある身かと問はせ給ふ。其業平は其時だにも。昔男といはれし身の。ましてや今は遠き世に。故もゆかりもあるべからず　ワキ上「もつとも仰はさる事なれ共。爰は昔の舊跡にて　女「主こそ遠く業平の　ワキ「あとは殘りてさすがにいまだ　女「聞えはくちぬ世語を　ワキ「語れば今も

（三一）

上歌 同「昔男の名ばかりは。在原寺の跡ふりて。〳〵。松も老たる塚の草。是こそそれよ亡き跡の。一村ずゝきの穗に出づるはいつの名殘なるらん。草茫々として露深々と古塚の。眞なるかな古への。跡なつかしき景色かな〳〵

ワキ「猶々業平の御事委く御物がたり候へ

クリ 地「昔在原の中將年へて爰に石の上ふりにし里も花の春。月の秋とて。

住給ひしに　シテサシ「其頃は紀の有常が娘と契り妹背の心淺からざり
しに　又河内の國高安の里に知る人ありて二道に忍びて通ひ給
ひしに　「風ふけば沖つ白浪龍田山　夜半にや君が獨ゆくらん
とおぼつかなみのよるの道行衛を思ふ心とげてよその契はかれ
〴〵なり　下女「げに情しるうたかたの　同　哀をのべしも理りなり
クセ下 昔此國に住む人のありけるが宿を並べて門の前井筒によりてう
(幼子)なひ子の友だち語らひて互に影を水鏡面を並べ袖をかけ心の水
も底ひなく移る月日も重なりておとなしくはぢがはしく互に今

はなりにけり其後彼まめ男言葉の露の玉章の心の花も色そひて
女上「筒井筒ゐづゝにかけしまろがたけ　同 老にけらしな妹見ざるまに
と詠みて贈りける程に其時女もくらべこしふりわけ髮も肩過ぬ
君ならずして誰かあぐべきとたがひに詠みし故なれや筒井筒の
女ともきこえしは有常が娘の古き名なるべし　地上ロンギ「げにや古りに
し物語きけば妙なる有様のあやしや名のりおはしませ　女上「眞は
我は戀衣紀の有常が娘ともいさ白浪の龍田山夜はに紛れて來り
たり　地上「ふしぎやさては龍田山色にぞ出る紅葉ばの　女「紀の有

常が娘とも　「又は井筒の女とも　女「恥かしながら我なりと
いふやしめ縄のながき世を契りし年は筒井筒ゐづゝの陰にかく
れけり〳〵　ワキ待謡「更行くや在原寺の夜の月〳〵昔を返す衣手
に夢待ちそへて假枕苔の莚に臥しにけり〳〵　後シテ上一聲「あだなりと名
にこそ立てれ櫻花年に稀なる人も待ちけりかやうに詠みしも我
なれば人待女ともいはれしなり我筒井筒の昔より眞弓槻弓年を
へて今はなき世に業平の筐のなをし身にふれて恥かしや昔男に
移り舞　地「雪を廻らす花の袖　序舞　ワカ女上「こゝに來て昔ぞ返す在原の

地上ノル打上「寺井にすめる月ぞさやけき〳〵　ノラズ女下「月やあらぬ春や昔となが
めしもいつの頃ぞや筒井筒　地下「つゝ井筒井筒にかけし　下女「ま
ろがたけ　地上「老にけらしな　女下「老にけるぞや　地上「さながら見み
えし昔男の冠なをし女とも見えず男なりけり業平の面影
ノラズ「見ればなつかしや　同下　我ながらなつかしや亡婦魄靈の姿はしぼ
める花の色なうて匂ひ殘りて在原の寺の鐘もほの〴〵と明ければ
古寺の松風や芭蕉葉の夢も破れて醒にけり夢は破れあけにけり

四番目 略三番 狂女物

三井寺 八月

シテ 女（後 狂）　ワキ 三井寺住僧
子方 寺の児　ツレ 従僧

シテ女 サシ ロハク「南無や大慈大悲の観世音さしも草さしもかしこき誓ひの末。一称一念猶頼みありましてや此程日を送り夜を重ねたる頼みのする。なぞか其かひなからんと思ふ心ぞ哀なる 下歌 憐み給へ思ひ子の。行末何となりぬらん〳〵 上歌 枯たる木にだにも〳〵。花咲くべくはおのづから。いまだ若木のみどり子に二度などか逢はざらん。〳〵

女詞 あら有難や候。少し睡眠の内に。あらたなる霊夢を蒙りて候はいかに。▲わらはをいつも訪ひ慰むる人の候。あはれ来り候へかし語らばやと思ひ候

女「唯今少し睡眠の内に。あらたなる御霊夢を蒙りて候。我子に逢はんと思はば。三井寺へ参れとあらたに御霊夢を蒙りて候ほどに 女「あら嬉しと御あはせ候物哉。▲告に任せて三井寺とやらんへ参り候べし

ワキ ツレ 次第 ツヨク「秋も半のくれ待て〳〵。月に心や急ぐらん

ワキ「是は江州園城寺の住僧にて候。又是にわたり候おさなき人は愚僧を頼む由仰せ候間。力なく師弟の契約をなし申して候。又今夜は八月十五夜明月にて候程に。おさなき人を伴ひ申し皆々講堂の庭に出て月を眺めばやと存候

ワキ ツレ 上歌 類ひなき名を望月の今

宵とて／＼夕を急ぐ人心知るも知ぬも諸共に雲をいとふや乗てより月の名顆む日影かな／＼「雪ならば幾度袖を拂はまし花の吹雪と詠じけん志賀の山越うち過ぎて眺の末はみづうみのには照る比叡の山高み上見ぬ鷲のお山とやらんを今目の前に拜む事よあら有難の御事や。　か樣に心あり顔なれども我は物に狂ふよなういや我ながら理りなりあの鳥類や畜類だにも親子の哀はしるぞかしましてや人の親として。いとほし悲しと育てつる。子の行衛をも白糸の　「亂れ心や狂ふらん　「都の秋を捨て行

かば　※月見ぬ里に住みや習へるとさこそ人の笑はめよし花も紅葉も月も雪も古里に我子のあるならば田舍も住みよかるべしいざ古里に歸らん／＼歸ればさゝ浪や志賀唐崎の一つ松翠子の類ひならば松風にこと問はん松風も今はいとはじ櫻さく春ならば花園の里をも早く杉間ふく風凄しき秋の水の三井寺に着きにけり三井寺に早くつきにけり「桂はみのる三五の暮名高き月にあこがれて庭の木陰にやすらへば「げに／＼今宵は三五夜中の新月の色二千里の外の故人の心水の面にてる月なみをか

地　そふれば秋も最中夜もなかば。所からさへ面白や月は山風ぞ時雨に鳰の海〳〵。泪も粟津の森みえて。海ごしの幽に向ふ影なれど月はますみの鏡山山田矢橋の渡舟の夜は通ふ人なく共月の誘はばおのづから舟もこがれて出らん。舟人もこがれ出づらん〳〵

女「面白の鐘の音やな。我古里にては清見寺の鐘をこそ常は聞馴れしに。是は又さゝ波や三井の古寺鐘はあれど。昔にかへる聲は聞えず。誠や此鐘は秀郷とやらんの龍宮より。取て歸りし鐘なれば。龍女が成佛の縁に任せて。わらはも鐘をつくべきなり　影はさながら

霜夜にて〳〵。月にや鐘は冴ぬらん

ワキ「やあ〳〵暫く。狂人の身にて何とて鐘をばつくぞ急でのき候へ

女「よる庾公が樓に登りしも。月に詠ぜし鐘の音なり許さしめ

ワキ「それは心ある故人の詞。狂人の身として鐘つくべき事。思ひもよらぬ事にてあるぞとよ

女「今宵の月に鐘つく事。狂人とてな厭ひ給ひそ或詩に曰く。團々として海嶠を離れ漸々として雲衢をいづ。此後句なかりしかば。明月に向つて心をすまいて今宵一輪滿り清光何れの所にかなからんと。

詞　此句をまうけてあまりの嬉しさに心亂れ。高樓に登つて鐘をつく。

（仕手）（鐘の段）かほどよりクリ地前迄

人々いかにと咎めしに。是は詩狂と答ふ。かほどの聖人なりしだに。月には乱るゝ心あり。ましてや拙き狂女なれば。許し給へや人々よ。煩悩の夢を醒すや法の聲も静に。先初夜の鐘をつく時は。諸行無情と響くなり。後夜の鐘をつく時は。是生滅法と響くなり。晨朝の響は。生滅々已。入相は。寂滅爲楽と響て。菩提の道の鐘の聲。月も數そひて百八煩悩の眠りの驚く夢の世の迷ひもはやつきたりや。後夜の鐘に我も五障の雲晴れて。眞如の月の影を眺めおりて明さん。夫長楽の鐘の聲は。花の外

※雑子子調よりロンギ前までわきて柱り迄

につきぬ。又龍池の柳の色は。雨の中にふかし。其外爰にも世々の人言葉の林のかねてきく。名も高砂の尾上の鐘。暁かけて秋の霜曇るか月もこもりくの初瀬も遠し難波寺。名所多き。鐘の音。盡ぬや法の聲ならん。山寺の春の夕暮きて見れば入相の鐘に花ぞ散けるげに惜め共など夢の春と暮ぬらん。其ほか暁の妹背を惜むきぬ〴〵の恨をそふる行衛にも枕の鐘や響くらん。又待宵に更行く鐘の聲きけばあかぬ別の鳥は物かはと詠ぜしも。戀路の便りの音信の聲ときくものを。又は老らくの寢覺ほどふる

古へを今思ひねの夢だにも涙心のさみしさに此鐘のつくづくと。思ひを盡くす曉をいつの時にかくらべまし　女上「月落ち鳥啼いて。

小謡 同「霜天に滿て凄ましく江村の漁火もほのかに半夜の鐘の響は客の船にや通ふらん蓬窓雨滴りて馴れし汐路の楫枕。うきねぞ變る此海は浪風も靜にて秋の夜すがら月すむ三井寺の。鐘ぞさやけき

子詞「いかに申べき事の候　ワキ「何事にて候ぞ　子「是なる物狂の國里を。とふて給はり候へ　ワキ「是は思ひもよらぬ事を承り候物かな。さりながら易き間の事尋て參らせうずるにて候。いかにこれなる狂女。

おことの國里はいづくの者にてあるぞ　女「是は駿河の國清見が關の者にて候　子カヽル上「何のう清見が關の者と申候か　女「あらふしぎや。今の物仰せられつるは正しく我子の千滿殿ござめれあら珍しやなう　ワキ「暫く是なる狂女は。そこつなる事を申者哉。さればこそ物狂にて候　女カヽル上「のう是は物に狂はぬ物を。物に狂ふも別れ故。逢ふ時は何しに狂ひ候べき是は正しき我子にて候　脇ツレ「さればこそ我子と申か筋なき事を申候。急ひてのき候へ　子「あら悲しやさのみな御打ち候ひそ　ワキ「言語同斷。はや色に出給ひで候。此上はまつす

ぐに御名乗りへ　「今は何をか包むべき我は駿河の國清見が關の者なりしが人商人の手に渡り今此寺にありながら母上我を尋給ひて。か様に狂ひ出給ふとは夢にも我はしらぬなり　「又わらはも物に狂ふことあの兒に別れし故なれば。適々あひ見る嬉しさのまゝ頓て母よと名のる事。我子の面ぶせなれど子故に迷ふ親の身は。恥も人目も思はれず。　あら痛はしの御事や余所めも時による物を逢ふを悦び給ふべし　「嬉しながらも衰ふる姿はさすが恥かしのもりて餘れる涙かな　「げに逢難き親と子の縁は

盡せぬ契りとて　「日こそ多きに今宵しも　「此三井寺に廻りきて　「親子に逢ふは　「何故ぞこの鐘の聲たてゝ物狂ひのあるぞとてお咎めありし故なれば。常の契りには別れの鐘といとひしに。親子のための契りには鐘ゆゑに逢ふ夜なり嬉しき鐘の聲哉かくて伴ひたち歸り。〳〵親子の契り盡せずも富貴の家となりにけりげに有難き孝行の。威徳ぞめでたかりける威徳ぞめでたかりける

四五番目　天鼓　七月

前シテ　父王伯　ワキ　勅使　後シテ　天鼓の靈

ワキ詞「是は唐後漢の帝に仕へ奉る臣下也。扨も此國の傍に王伯王母とて夫婦の者あり。彼者一人の子をもつ。其名を天鼓と名づく。彼を天鼓と名付る事は。彼が母夢中に天より一つの鼓降りくだり胎内に宿るとみて出生したる子なれはとて。其名を天鼓と名づく其後天より眞の鼓ふり下り。うてば其聲妙にして。聞く人感を催せり。此由帝聞召され。鼓を内裏に召されしに。天鼓深く惜み。鼓を抱き山中に隱れぬ。然れ共いづくか王地ならねば官人をもつてさがし出し。天鼓をば呂水の江に沈め。鼓をば内裏に召され。阿房殿雲龍閣にすゑ置れてけり。又其後彼鼓をうたせらるれ共更になる事なし。いか様主の別を歎きならぬと思召さるゝ間。彼者の父王伯を召してうたせよとの宣旨に任せ。唯今王伯が私宅へと急ぎけり。

シテ一セイ「露の世に。猶老の身のいつまてか。又此秋に殘るらん

サシ　傳へきく孔子は鯉魚に別れて。思ひの火を胸にたき。白居易は子を先立て。枕に殘る藥を恨む。是皆仁義禮智信の祖師文道の大祖たり。我等が歎くは咎ならじと。

下歌　思ふ思ひに堪かぬる淚いとなき袂かな

上歌　思はじと思ふ心のな

どやらん夢にもあらずうつゝにもなき世の中ぞ悲しき〳〵

上歌 よしさらば思ひ出じと思ひ寝の〳〵。闇の現に生れきて忘れんと思ふ心こそ忘れぬよりは思ひなれ。唯何故の憂身の命のみこそ恨みなれ〳〵

ワキ「いかに此屋の内に王伯があるか

シテ「誰にて渡り候ぞ

ワキ「是は帝よりの宣旨にてあるぞ

シテ「宣旨とはあら思ひよらずや何事にて御座候ぞ

ワキ「偖も天鼓が鼓内裏に召されて後色々打たせらるれ共更になる事なし。いか樣主の別れを嘆きならぬと思召さるゝ間。王伯に參りて仕れとの宣旨にてあるぞ。急いで參内仕候へ

シテ「仰畏て承り候さりながら。勅命にだにならぬ鼓の。老人が參りてうちたればとて。何しに聲の出づべきぞ。いや〳〵是も心得たり。勅命を背きし者の父なれば重ねて失はれん爲にてぞあるらん。よし〳〵それも力なし。我子の爲に失はれんはそれこそ老の望なれ。あら歎くまじや頓て參り候べし

ワキ「いや〳〵左樣の宣旨ならず。唯々鼓を打たせんとの。其爲ばかりの勅諚なり。急いで參り給ふべし

シテ上歌「たとひ罪には沈むとも〳〵。又は罪にも沈まず共うきながら我子のかたみに帝を拜み參らせん〳〵

ワキ「急

ぐ間程なく内裏にてあるが此方へ來り候へ　シテ「勅諚にて候程に。是迄は參りて候へ共老人が事をば御免あるべく候　ワキ「申所は理りなれ共先鼓を仕候へ。ならずは力なき事急いで仕候へ　シテ「扨は辭す共叶ふまじ勅に應じてうつ鼓の聲もし出ばそれこそは我子の筐といふ月の上に輝く玉殿に始て望む老の身の　生てある身は汲方の〱天の鼓を打たうよ　其磧礫にならつて玉淵をうかゞはざるは驪龍の蟠まる所をしらざるなり　◎シテ「げにや世世毎の假の親子に生れきて。　同「愛別離苦の思ひ深く恨むまじき人

◎囃子終り迄

を恨み悲しむまじき身を歎きて。我と心の闇深く輪廻の波に漂ふ事生々世々もいつ迄の　シテ「思ひのきづな長き世の。苦みの海に沈むとかや　地をはしる獸。空をかける翅まで親子の哀しらざるや況や佛性同體の人間此生に。此身を浮かめずはいつの時か生死の海を渡り山を越て彼岸に至るべき　シテ「親子は三界の首枷ど。きけば眞に老心別れの涙の雨の袖しほれぞ增る草衣身を恨みても其かひのなき世に沈む罪科は唯命なれや明暮の時の鼓の現とも思はれぬ。身こそ恨みなれ。◎ロンギ地上「鼓の時も移るなり涙をとめて老

◎小謡況やよりロンギ前迄

人よ急いで皷うつべし　「げに〳〵是は大君の忝けなしや勅命の老の時も移るなり急いで皷打ふよ　「打つや打たずや老涙の立寄る影も夕月の　「雲龍閣の光さす　「玉の階　「玉の床に老の歩みも足弱く薄氷をふむ如くにてこゝろも危き此皷うてはふしぎや其聲の心耳をすます聲出てげにも親子の驗の聲君も哀と思召して龍眼に御涙を浮め給ふぞ有難き　「いかに老人唯今皷の音の出たる事誠に哀と思召さるゝ間老人には數の寶を下さるゝ也又天皷が跡をば管絃講にて御弔ひあるべきとの勅諚なり。

心易く存じ先々老人は私宅に歸り候へ　「あら有難や候さらば老人は私宅に歸り候べし　「偖も天鼓が身を沈めし呂水の堤に御幸なつて同じく天の皷をすゑ糸竹呂律の聲々に〳〵法事をなしてなき跡を御弔ひぞ有難き頃は初秋の空なればはや三伏の夏たけ風一聲の秋の空夕月の色も照りそひて水滔々として波悠々たり　「あら有難の御弔ひやな勅を背きし天罰にて呂水に沈みし身にしあれば後の世までも苦みの海に沈み涙にうたれて呵責のせめも隙なかりしに思はざる外の御弔ひに浮み出たる呂

水の上曇らぬ御代の有難さよ　ワキカヽル 打上「ふしぎやなはや更過ぐる水の
面にけしたる人の見えたるは如何なる者ぞ名を名のれ　シテ「是は（怪たる）
天鼓が亡靈なるが御弔ひの有難さに是迄顯はれ參りたり　ワキカヽル「扨
は天鼓が亡靈なるかや然らばかゝる音樂の舞樂も天鼓が手向の
鼓うちて其聲出づならばげにも天鼓が驗なるべしはや〳〵鼓を
仕つれ　シテ「嬉しや偖は勅諚ぞと夕月かゝやく玉座のあたり
ワキカヽル「玉の笛の音聲澄て　「月宮の昔もかくやと計り　ワキ「天人も影向
シテ「菩薩もこゝに天降ります氣色にて同じくうつなり天の鼓　上歌同 打

ちならす其聲の〳〵呂水の波は滔々と打なり〳〵汀の聲のよ
（仕舞）面白やより終り迄
り引く糸竹の手向の舞樂は有難や　打上 シテ下「面白や時もげに〳〵　同「秋
風樂なれや松の聲柳葉を拂つて月も涼しく星も相逢ふ空なれや
烏鵲の橋の元に紅葉をしき二星の舘の前に風冷かに夜も更けて
（たんだくは手拍くの意）
上 夜半樂にもはやなりぬ人間の水は南星は北にたんだくの天の海
づら雲の泪たちそふや呂水の堤の月に嘯き水に戯れ波をうがち
袖を返すや夜遊の舞樂も時去りて五更の一點鐘もなり鳥は八聲
のほの〴〵と夜も明け白む時の鼓數は六つの巷の聲に又打寄て

十一

現か夢かまた打寄て現か夢まぼろしとこそなりにけれ

脇能

白樂天

季無

前シテ　漁翁
ツレ　漁夫
ワキ　白樂天
後シテ　住吉明神

ワキカヽル サクヨ「抑も是は唐の太子の賓客白樂天とは我事也。扨も是より東に當て國あり名を日本と名づく。急ぎ彼土に渡り日本の智恵を計れとの宣旨に任せ。唯今海路に赴き候

道行 ワキ 三人「舟漕ぎ出でゝ日の本の。〳〵。其方の國を尋ん。東海の波路遙かに行く舟の。〳〵。跡に入日の影殘る。雲の旗手の天つ空。月また出る其方より山見えそめて程もなく日本の地にも着にけり〳〵

ワキ「海路をへて急ぎ候程に。是ははや日本の地に着て候。暫く此所に碇をおろし。日本のやうを眺め

ばやと存候　シテツレ二人一聲「不知火の筑紫の海の朝ぼらけ月のみ殘る氣色哉
シテサシ「巨水滿々として碧浪天を浸し　二人「越を辭せし范蠡が扁舟に棹を移
すなる五湖の煙の浪の上かくやと思ひしられたりあら面白の海
小謠 上やな　下歌「松浦潟西に山なき有明の　上歌「月の入る雲も浮むや沖つ
舟〳〵互にかゝる朝またき海のそなたか唐土の船路の旅も遠
からで一夜泊りと聞くからに月も程なき名殘かな〳〵　ワキ「我
萬里の波濤を凌ぎ日本の地にもつきぬ是に小船一艘浮めり見れ
ば漁翁也いかにあれなるは日本の者か　シテ「さん候是は日本の漁

翁にて候御身は唐の白樂天にてましますな　ワキ上カル「ふしぎやな始て
此土に渡りたるを白樂天と見る事は何の故にてあるやらん
ツレ「其身は漢土の人なれ共名はさきだつて日本に聞ゆ隱れなければ
申なり　ワキカル「たとひ其名は聞ゆる共それぞとやがて見知る事ある
べき事とも思はれず　シテツレ二人下「日本の智慧を計らんとて樂天來り給ふ
べきとの聞えは普き日の本に西を眺めて沖の方より船だに見ゆ
れば人毎にすはやそれぞと心づくしに　上歌同「今や〳〵と松浦ぶね
小謠 〳〵沖より見えて隱れなき唐土船の唐人を樂天と見る事は何

かそらめなるべきむつかしやことさやぐ唐人なればお言葉をも
とても聞も知らばこそあらよしな釣棹の暇惜しや釣たれん〳〵
ワキ「猶々尋ぬべき事あり舟を近付け候へ。如何に漁翁扨此ごろ日本に
は何事を翫ぶぞ　シテ「扨唐土には何事を翫び給ひ候ぞ　ワキ「唐には
詩を作つて遊ぶよ　シテ「日本には歌をよみて人の心を慰め候
ワキ「そも歌とはいかに　シテ「夫天竺の靈文を唐土の詩賦とし。唐土の詩
賦をもつて我朝の歌とす。されば三國を和らげ來るを以て大きに
和らぐと書いて大和歌とよめり知し召されて候へ。共翁が心を御
覧ぜんためしぞな　ワキ「いや其儀にてはなし。いでさらば目前の氣色
を詩に作つて聞かせう青苔衣をおびて巖の肩に懸り。白雲帶に似
て山の腰を圍る。心得たるか漁翁　シテ「青苔とは青き苔の巖の肩に
懸れるが衣に似たるこかや白雲帶に似て山の腰をめぐる。面白し
〳〵日本の歌も唯是ぞよ。苔衣きたる巖はさもなくて衣着ぬ山の
帶をする哉　ワキ「ふしぎやな其身は賤しき漁翁なるが。かく心ある
詠歌を連ぬる。其身はいかなる人やらん　シテ「人がましやな名もな
き者なり。され共歌をよむことは。人間のみに限るべからず生とし

生る物毎に歌をよまぬはなき物を　ワキ「そもや生とし生る物ごとに。
扨は鳥類畜類までも　シテ「和歌を詠ずる其ためし　ワキ「和國に於て
證歌多し　シテ上歌同「花に啼く鶯水に住める蛙迄唐土は知らず日本には。
歌をよみけるぞ翁も大和歌をばかたの如くよむなり　クセ　抑も鶯の
うたをよみたる證歌には孝謙天皇の御宇かとよ大和國高天の寺
にすむ人のしきねんの春の頃軒端の梅に鶯の來りて鳴く聲を
きけば初陽毎朝來不相還本栖となく文字に寫してこれを見れば
三十一文字の詠歌の言葉なりけり　シテ上「初春のあした毎には來れ

共　あはでぞ歸るもとの栖にと聞えつる鶯のこゑを始として。その
外鳥類畜類の人にたぐへて歌をよむためし多くありそ海の。
濱の眞砂の數々に生とし生る物何れも歌をよむなり　地上「げにや
和國の風俗の〳〵。心ありける海士人のげに有難き習ひかな
シテ上「迚も和國のもて遊び和歌を詠じて舞歌の曲其色々を顯はさん
地上「そもや舞樂の遊びとは其役々は誰ならん　シテ「誰なくとても御覧
ぜよ我だにあらば此舞樂の　地　皷は波の音笛は龍の吟ずる聲舞
人は此尉が老の浪の上に立つて青海に浮みつゝ海青樂を舞ふべ

しや　「蘆原の　「國も動かじ萬代までに　「山影のうつるか

水の青き海の　「浪の皷の海青樂　「西の海青きが原の波間よ

り　「顯れ出し住吉の神住吉の神すみ吉の　「顯れ出し住吉の

住吉の神の力のあらん程はよも日本をば從へさせ給はじ速かに

浦の波立歸り給へ樂天。住吉現じ給へば〳〵伊勢石淸水賀茂

春日鹿島三島諏訪熱田安藝の嚴島の明神は娑竭羅龍王の第三の

姫宮にて海上に浮かんで海青樂を舞ひ給へば八大龍王は八りん

の曲を奏し空海にかけりつゝまひ遊ぶ小忌衣の手風神風に吹戻

されて唐船はこゝより漢土に歸りけりげに有難や神と君げに有

がたや神と君が代のうごかぬ國ぞひさしき

二番目
修羅物

實盛

八月
前シテ 老翁
ワキ 遊行上人
ツレ 從僧 二人
後シテ 齋藤實盛

ワキ サシ「夫西方は十萬億土。遠く生るゝ道ながら。爰も己心の彌陀の國。貴賤群集の稱名の聲

ワキツレ「日々夜々の法の場

ワキ「げにも誠に攝取不捨の

ワキツレ「誓ひに誰か

ワキ「殘るべき

ワキ ワキツレ二人 上歌「獨り猶佛の御名を尋ねみん。おのおの歸る法の場。知るも知ぬも心引く。誓ひの綱にもるべきや。知る人もしらぬ人をも渡さばや。彼國へゆく法の舟。浮むも安き道とかや。おのおの安き道とかや。

シテ サシ「笙歌遙に聞ゆ孤雲の上。聖衆來迎す落日の前。あらたふとやけふも又。紫雲の立てゆくぞや。鐘の音念佛の聲の聞えけり。扨は聽聞も今なるべし。さなきだに立居苦しき老の涙の。寄りもつかずは法の場に。よそながらもや聽聞せん。一念稱名の聲のうちには攝取の光明。曇らね共老眼の。通路猶もつて明かならず。よしよし少しは遲くとも。共爰を去る事遠かるまじや南無阿彌陀佛

（天ざかるは空遠きの意）

ワキ「いかに翁。扨も毎日の稱名に怠る事なし。されば志の者と見る處に。れてこの姿余人の見る事なし。誰に向つて何事を申すぞと皆人不審しあへり。今日はおことの名を名のり候へ

シテ「是は思ひもよらぬ仰かな。本より所は天ざかる。鄙人なれば人がましやな名もあら

はこそ名乘もせめ唯上人の御下向偏に彌陀の來迎なればかしこうぞ長生して此稱名の時節に逢ふ事盲龜の浮木うどんげの花待ちえたる心地して老の幸ひ身にこえ悦びの涙袂にあまるされば此身ながら安樂國に生るゝかと無比の歡喜をなす處に輪廻妄執の閻浮の名を又改めて名のらん事口惜しうこそ候へ　「げに〳〵翁の申處理り至極せりさりながら一つは懺悔の廻心共なるべし唯おことが名を名乘り候へ　「我はなのらでは叶ひ候まじきか　「中々の事急いで名のり候へ　「さらば御前なる人を

のけられ候へ近う參りて名のり候べし　「本より翁の姿餘人の見る事はなけれ共所望ならば人をばのくべし近うよりて名乘り候へ　「昔長井の齋藤別當實盛は此篠原の合戰に討たれぬ聞召し及ばれてこそ候らめ　「それは平家の侍弓取つての名將其軍物語は無益唯おことの名を名乘り候へ　「いやさればこそ其實盛は此御前なる池水にて鬢髮をも洗はれしとなりされば其執心殘りけるか今も此あたりの人には幻の如く見ゆると申候　「偖今も人に見え候か　「深山木の其梢とは見えざりし櫻は花に顯

はれたる老木をそれと御覧ぜよ　ワキカヽル「ふしぎや扨は實盛の昔を聞
つる物語人の上ぞと思ひしに身の上なりけるふしぎさよ扨はお　詞
ことは實盛の其幽靈にてましますか　シテ「我實盛が幽靈なるが魂
は冥途にありながら魄は此世に留まりて　ワキカヽル「猶執心の闇浮の世
に　シテ「二百余歳の程はふれ共　ワキ上「浮みもやらで篠原の　シテ「池の
あだ浪よるとなく　ワキ「晝ともわかで心の闇の　シテ「夢ともなく
ワキ「現ともなき思ひをのみ　シテ上歌同「篠原の草葉の霜の翁さび〳〵
人なとがめそ假初に顯はれ出たる實盛が名を洩し給ふなよなき

世語も恥かしとて御前を立去りて行かと見れば篠原の池の邊に
て姿はまぼろしと成てうせにけり〳〵　カヽル上中入ワキ「いざや別時の稱名
にて彼幽靈を弔はんと　上歌ワキ同ツレ「篠原の池の邊の法の水〳〵深くぞ
頼む稱名の聲すみ渡る弔ひの初夜より後夜に至る迄心も西へ行
く月の光りと共に曇りなき鐘をならして夜もすがら　ワキ下太コ「南無阿
彌陀佛なむあみだぶ　後シテ下出端「極樂世界にゆきぬれば長く苦界を越過
ぎて輪廻の古郷隔りぬ歡喜の心いくばくぞや所は不退の所命は
無量壽佛とのう頼もしや念々相續する人は　地「念々毎に往生す

シテ「南無といつぱ　地「即ち是歸命　シテ下「阿彌陀といつぱ　地「其行此義を以ての故に　シテ上「必ず往生をうべしとなり　同上「ありがたや

ワキカヽル上「ふしぎやな白みあひたる池の面に幽に浮みよる者をみればありつる翁なるが甲冑を帶するふしぎさよ　シテ「埋木の人しれぬ身と沈め共心の池の云ひがたき修羅の苦患の數々を浮めてたばせ給へとよ　ワキ「是程にまのあたりなる姿言葉を餘人は更に見も聞きもせで　シテ「唯上人のみ明かに　ワキカヽル「見るや姿も殘りの雪の　シテ下「鬢鬚白き老武者なれ共　ワキ「其出立は華やかなる　シテ「粧ひことに曇

りなき　ワキ「月の光　シテ「燈火の影　※闇からぬ夜の錦の直たれに萠黄匂の鎧きて黄金作のたち刀今の身にてはそれとても何か寶の池の蓮の臺こそ寶なるべけれげにや疑はぬ法の敎へは朽ちもせぬ黄金の言葉多くせばなどかは至らざるべき※

※小謡

シテクリ「夫一念彌陀佛即滅無量罪　則ち廻向發願心心を殘す事なかれ

シテサシ「時至て今宵逢難き御法をうけ　慚愧懺悔の物語猶も昔を忘れかねて忍ぶに似たる篠原の草の陰野の露と消えし有樣語り申べし

シテ（語リ）「扨も篠原の合戰破れしかば源氏の方に手塚の太郎光盛木曾殿の

御前に參りて申樣。光盛こそ奇異の曲者と組んで首取て候へ。大將かと見ればつゞく勢もなし。又侍かと思へば錦の直垂を着たり。名のれ〳〵と責むれ共終に名のらず。聲は坂東聲にて候と申す。木曾殿天晴長井の齋藤別當にてやあるらん。然らば鬢鬚の白髮たるべきが黑きこそ不審なれ。樋口の次郎は見知りたるらんとて召されしかば。樋口參り唯一目みて。涙をはら〳〵と流いてあなむざんやな齋藤別當にて候ひけるぞや。實盛常に申しは六十に餘つて軍をせば。若殿原と爭ひて。さきをかけんも大人げなし。又老武者と

て人々にあなづられんも口惜しかるべし。鬢鬚を墨にそめ若やぎ討死すべきよし常々申し候ひしが。誠に染て候。洗はせて御覽候へと。申しもあへず首をもち　御前を立てあたりなる此池波の岸に臨みて水の綠も影うつる柳の糸の枝たれて　氣はれては風新柳の髮を梳り氷消ては波舊苔の鬚を洗ひて見れば墨は流れおちて本の白髮となりにけりげに名を惜む弓取は誰もかくこそあるべけれやあらやさしやとて皆感涙をぞ流しける　又實盛が錦の直垂をきる事私ならぬ望なり實盛都を出し時宗盛公に申やう。

（住則…クセよりロンギまで）

古鄕へは錦をきて歸るといへる本文あり實盛生國は越前の者にて候ひしが近年御領につけられて武藏の長井に居住仕り候ひき。此度北國に罷下りて候はば定て討死仕るべし老後の思出是に過ぎじ御免あれと望みしかば赤地の錦の直垂をくだし給はりぬ

シテ上「然れば古歌にももみぢ葉を　わけつゝゆけば錦きて家に歸ると人や見るらんとよみしも此本文の心なりされば古への朱買臣は錦の袂を會稽山に飜へし今の實盛は名を北國のちまたにあげかくれなかりし弓取の名は末代に有明の月の夜すがら懺悔物語申

さん　地上「げにや懺悔の物語心の水の底清く濁りを殘し給ふなよ

●仕舞 其執心より終まで

シテ上「其執心の修羅の道めぐり〳〵て又爰に木曾と組まんとたくみしを手塚めに隔てられし無念は今にあり　シテ「つゞくつはものの誰々と名のる中にも先すゝむ　「手塚の太郎光盛　地「郎等は主を討たせじと　「かけ隔たりて實盛と　「押しならべて組む處を

シテ「あつぱれおのれは日本一の剛の者と軍鉾ずよとて鞍の前輪に押付て首かき切つてすてゝげり　地「其後手塚の太郎實盛が弓手にまはりて草摺をたゝみ揚げて二刀さす處をむずとくんで二疋が

あひにどうと落ちけるが　シテ下「老武者の悲しさは軍にはしつかれたり風にちゞめる枯木の力も折れて手塚がしたになる處を郎等はおちあひて終に首をはかきおとされて篠原の土となつて影もかたちもなき跡の影も形も南無阿彌陀佛弔ひてたび給へあとをとむらひてたび給へ

三番目

楊貴妃

八月　シテ　楊貴妃　ワキ　方士

ワキ次第「我またしらぬ東雲の、道をいづくと尋ねん　ワキ詞「是は唐土玄宗皇帝に仕へ申方士にて候。扨も我君まつりごと正しくまします中に。色をおもんじ艶を專とし給ふにより容色無双の美人を得たまふ楊家の娘たるによつて其名を楊貴妃と號す。然れ共さる仔細あつて馬嵬が原にて失ひ申て候。餘りに帝歎かせ給ひ。急ぎ魂魄のありかを尋て參れとの宣旨に任せ上碧落下黃泉まで尋申せども。更に魂魄のありかをしらず候。爰に未だ蓬萊宮に至らず候程に。此度

（幻）（俤）

蓬萊宮にと急ぎ候　道行「尋ねゆくまぼろしもがなつてにても〳〵。
魂のありかはそことしも。浪路をわけて行く舟のほのかに見えし
島山の。草の假寢の枕ゆふ常世の國に着にけり〳〵。　詞　急ぎ候程に。
蓬萊宮に着きて候。此所にて委く尋ばやと存候　上歌「有りし教に隨つ
（盤々）て蓬萊宮にきて見れば。宮殿ばん〳〵として更に邊際もなく莊嚴
（巍々）ぎゞとしてさながら七寶をちりばめたり漢宮萬里の粧ひ長生驪
山の有樣も。是には更になぞらふべからずあらうつくしの所やな。
詞　また教の如く宮中を見れば。太眞殿と額のうたれたる宮ありまづ

此所に徘徊し。ことの由をも伺はばやと存候　シテ女「昔は驪山の春の
園に。ともに眺めし花の色。移れば變るならひとて。今は蓬萊の秋の
洞に。獨り詠むる月影も。ぬるゝ顔なる袂哉。あら戀しの古へやな
ワキ上「唐の天子の勅の使方士是まで參りたり玉妃は内にましますか
女「何唐帝の使とは。何しに爰に來れるぞさ九花の帳を押のけて。玉の
簾をかゝげつゝ　ワキ「立出て給ふ御姿　女「雲の鬢づら　ワキ「花の顔
地小謡 ばせ　二人 寂寞たる御眼のうちに。涙を浮めさせ給へば　上歌 地 梨花一枝。
（太液）雨をおびたる粧ひの〳〵。たいえきの芙蓉のくれなゐ未央の柳

の緣も是にはいかでまさるべき。げにや六宮の粉黛の顏色のなきも理りや〳〵

ワキ「いかに申上候。扨も后宮世にましまし〻時だにも朝政は怠り給ひぬ。いはんやかくならせ給ひて後唯ひたすらの御歎きに。今は御命も危くみえさせ給ひて候。然れば宣旨に任せ是迄尋參り。御姿を見奉る事。唯是君の御心ざし淺からざりし故と思へば。いよ〳〵御痛はしうこそ候へ

女「げに〳〵汝が申す如く。今はかひなき身の露の。あるにもあらぬ魂のありかを。是まで尋給ふ事。御情には似たれ共訪ふにつらさのまさり草枯々ならば中々

の便の風は恨めしや。又今更の戀慕の涙。舊里を思ふ魂を消す

ワキ上「扨しもあるべき事ならねば。急ぎ歸りて奏聞せん。同 さりながら御形見の物をたび給へ

女「是こそありし形見よとて。玉の釵とり出て。方士に與へたびければ

ワキ「いやとよ是は世の中に。類ひあるべき物なれば。いかでか信じ給ふべき。御身と君と人しれず。契り給ひしことの葉あらばそれを驗に申べし

女「げに〳〵是も理りなり。思ひ出る我もまた其初秋の七日の夜。二星に誓ひし言の葉にも

同下「天にあらば願はくは比翼の鳥さならん。地にあらば願はくは連理

（私語）の枝とならんと誓ひし事をひそかに傳へよやさゝめごとなれ共今洩れそむる涙かな　上歌同「され共世の中の〳〵流轉生死のならひとて其身は馬嵬に留まりたましゐは仙宮に至りつゝ比翼も友をこひ獨り翅をかたしき連理も枝朽ちてたちまち色を變ずとも。同じ心のゆくゑならば終の逢瀬を賴むぞと語り給へや　上ロンギ　ワキ「さらばと云ひて出舟の伴ひ申し歸るさと思へば嬉しさの猶いかならん其心（見三重）　女上「我はまた何中々にみへの帶廻りあはんも知らぬ身に。よしさらば暫しまてありし夜遊をなすべし　地上「げにや驪山の宮の內月の夜遊の羽衣の曲　女「其かざしにて舞ひしとて　地「又取かざし（序破）　女「さす袖の　同「そよや霓裳羽衣の曲ろよや霓裳羽衣の曲そゞろにぬるゝ袂かな　女上「何事も夢まぼろしのたはむれや　地「あはれ胡蝶の舞ならん　クリ女「それ過去遠々の昔を思へばいつを衆生の始としらず。同「未來永々の流轉更に生死の終りもなし

女サシ（舞囃子終りまで）「然るに二十五有のうち何れか生者必滅の理りにもれん　同「先天上の五衰より須彌の四州の樣々に北州の千年終に朽ちぬ　女下「いはんや老少不定の境（仕舞クセより別れなりけりまで）　歎きの中の歎きとかや　我もそのかみは。

上界の諸仙たるが往昔のちなみありて假に人界に生れきて楊家の深窓に養はれ未だ知る人なかりしに君聞召れつゝ急ぎ召出し后宮に定めおき給ひ偕老同穴のかたらひも縁つきぬればいたづらに又此島に唯ひとり歸り來りてすむ水のあはれはかなき身の露のたまさかにあひ見たり靜に語れうき昔「さるにても思ひ出れば恨みある。　其文月の七日の夜君とかはせし睦言の比翼連理の言の葉もかれ〴〵になるさゝめごとの篠の一夜の契りだに。名殘は思ふ習なるにましてや年月なれて程ふる世の中に。さらぬ

別のなかりせば千世も人にはそひてましよしそれとてものがれ得ぬ會者定離ぞときく時はあふこそ別なりけれ　「羽衣の曲

「羽衣の曲稀にぞ返すをとめ子が　袖打ふれる心しるしや〳〵

「戀しき昔の物語〳〵盡さば月日も移り舞のしるしのかんざし又賜りて暇申てさらばとて勅使は都に歸りければ　「さるにても〳〵君に此世あひ見ん事も蓬が島つ鳥浮世なれ共戀しや昔はかなや別れの常世の臺にふし沈みてぞとゞまりける

四番目 略三番

玉葛

九月

前シテ 女 舟人　後シテ 玉葛内侍
ワキ 僧

ワキ詞「是ハ諸國一見の僧にて候。我此程ハ南都に候ひて。靈佛靈社殘りなく拜みめぐりて候。又是より初瀬詣でと志て候

道行「ならのはの名におふ宮の古ことを\/思ひつゞけて行末ハ。石の上寺ふしおがみ法のしるしや三輪の杉。山本ゆけば程もなく。初瀬川にもつきにけり\/。

詞 急ぎ候程に。初瀬川に着て候。心靜に參詣申さうずる

シテ女「程もなき。舟の泊りや初瀬川。のぼりかねたる。氣色かな

サシ「舟人も誰をこふとか大島の。浦悲しげに聲立てゝ。こがれきにける

いにしへの。はてしもいさや白浪の。よるべいづくぞ心の月の。み舟のそことはてしもなし　唯我獨りみなれ棹。雫も袖の色にのみ

上歌 小謡「暮てゆく。秋の涙か村時雨\/古河野邊のさみしくも。人や見るらん身の程も猶浮舟の棹をたえ。つなで悲しき。擬ひかな\/

ワキ「ふしぎやな此河ハ山川の。さも淺くしてしかもみなぎる岩間づたひを小さき舟に棹さす人を見れば女なり。そも御身ハいかなる人にてましますぞ

女「是ハ此初瀬寺に詣でくる者なり。又此川ハ所から。名に流れたる海士小舟。初瀬の河とよみおける其河の邊の江

にしあるに。不審をなさせ給ひそとよ　ワキ「あら面白のこと葉やな。
げに海士小舟初瀬とは。古きながめのこと葉なるべしさりながら。
又其類ひも浪小舟さして謂のあるやらん　女「いや何事のそれよ
り上歌同も先御覧ぜよ折柄に　ほの見えて色づく木々の初瀬山〳〵。
風もうつろふ薄雲に。日影も匂ふひとしほのさぞな氣色もかく河
のうらはの眺めまでげに類ひなや面白や。河音聞えて里つゞき奥
物ふかき谷の戸に。つらなる軒を絶々の霧間に殘す夕かな〳〵。
（補陀落山）かくて御堂に参りつゝ。〳〵。ふだらく山もまのあたり。四方の眺

も妙なるや。紅葉の色に常磐木の二本の杉に着にけり〳〵
女「是こそ二本の杉にて候へ能々御覧候へ　ワキ「偖は二本の杉にて候
ひけるぞや。二本の杉のたちどを尋ずば。古川野邊に君を見ましや
とは。何とよまれたる古歌にて候ぞ　女「是は光源氏の古へ。玉葛の
内侍此初瀬に詣て給ひしを。右近とかや見奉りてよみし歌なり共
に哀と思召して御跡を能弔ひ給ひ候へ　クリ地　げにやありし世を猶
夕顔の露の身の。消えにし跡は中々に何なてしこの形見もうし
サシ女「あはれ思ひの玉葛。かけてもいさや知らざりし。心づくしの木の

間の月。雲井のよそにいつしかと鄙の住居のうきのみか披しもたへてあるべき身を　「猶しをりつる人心の。あらき浪風たちへだて　たよりとなればはや舟に乗後れじと松浦潟唐土船をしたひしに。心ぞかはる我はたゞ。うき島を漕離れても行方や何くとまりと白波に。ひゞきの灘もすぎ思ひにさはる方もなし。かくて都のうちとても。我は浮きたる舟のうちなほやうきめを水鳥の陸にまどへるこゝちしてたづきも知らぬ身の程を思ひ歎きてゆきなやむ足曳の大和路や唐土迄も聞ゆなる。初瀬の寺に詣でつゝ

女上「年もへぬいのる契りは初瀬山。尾上の鐘のよそにのみ思ひ絶にし古への人に二度ふた本の杉のたちどを尋ずは古川のべと詠めけるけふの逢瀬も。おなじ身を思へば法の衣の。玉ならば玉葛迷ひを照し給へや

ロンギ　地上　げにふるき世の物語きけば涙もこもり江にこもれる水の哀かな

女上「あはれ共思ひはそめよ初瀬川早くもしるや淺からぬ

地「縁にひかるゝ

女「心とて

同「たゞ頼むぞよ法の人。吊ひ給へ我こそは涙の露の玉の名と名のりもやらずなりにけり

中入

ワキ「扨は玉葛の内侍假に顯れ給ひけるぞや。たとひ業因れ

もくとも照さゞらめや日の光り〳〵大慈大悲の誓ひある法の燈火明かになきかげいざや弔らはん〳〵「戀ひわたる身はそれならで玉葛いかなる筋を尋ねきぬらん尋ても法の教へには逢はんとの心ひかるゝ一筋に其まゝならで玉葛の亂るゝ色は恥かしやつくもがみつくもがみ我や戀ふらし面影に「立つやあだなる塵の身は「はらへど〳〵執心の「ながき闇路や「黒かみの「あかぬやいつの寢亂れ髪「むすぼゝれゆく思ひかなげに妄執の雲霧の〳〵迷ひもよしやうかりける人を初

（仕舞）げに妄執より終まで

瀬の山颪はげしくおちて露も涙もちり〳〵に秋の葉の身の朽ち果てぬ恨めしや「うらみは人をも世をも　恨みは人をも世をも思ひ思はじ唯身ひとつの報ひの罪や數々のうき名に立ちしも懺悔の有樣あるひはわき返り岩もる水の思ひにむせびあるひはこがるゝや身より出づる玉と見るまで包め共螢にみだれつる。影もよしなや耻かしやと此妄執をひるがへす心は眞如の玉葛こゝろは眞如の玉葛長き夢路は覺めにけり

五番目

融（トホル）

八月　前シテ　鹽汲翁　ワキ　僧　後シテ　融大臣

ワキ詞「是は東國方より出たる僧にて候。我未だ都を見ず候程に。此度思ひたち都に上り候。下歌 思ひたつ心ぞしるべ雲を分け舟路を渡り山をこえ千里も同じ一足に〳〵。上歌 夕を重ねあさごとの。宿の名殘も重なりて。都に早く着きにけり〳〵

詞「急ぎ候程に。是ははや都に着て候。此あたりをば六條河原の院とやらん申候。暫く休らひ一見せばやと思ひ候

シテ「月もはや。出鹽に成て鹽がまの。浦さび渡る氣色かな　サシ 陸奥はいづくはあれど鹽がまの。うらみて渡

る老が身のよるべもいさや定めなき心もすめる水の面に照る月なみを數ふれば。今宵ぞ秋の最中なるげにやうつせば鹽がまの月も都の最中かな。下歌 秋は半身は既に老重りて諸白髪　上歌 雪とのみ。積りぞきぬる年月の〳〵。春を迎へ秋をそへ時雨る松の風迄も我身の上と汲てしる鹽馴衣袖さむき浦はの秋の夕かな〳〵

ワキ「いかに是なる尉殿御身は此あたりの人か　シテ「さん候此所の鹽汲にて候

ワキ「ふしぎや爰は海邊にてもなきに。鹽汲とは誤りたるか尉殿

シテ「あら何ともなや。偖爰をばいづくとしろしめされて候ぞ

ワキ「此所をば六條河原の院とこそ承て候へ　シテ「河原の院こそ塩がまの浦候よ。融の大臣陸奥の千賀の塩がまを。都の中に移されたる海邊なれば名に流れたる河原の院の。河水をもくめ池水をもくめ。爰塩がまの浦人なれば。塩汲となどれはさぬぞや　ワキ「げに〳〵陸奥の千賀の塩竈を。都の中に移されたる事承及びて候。偖ハあれなるハ籬が島候か　シテ「さん候あれこそ籬が島候よ。融の大臣常ハ御舟をよせられ。御酒宴の遊舞様々なりし所ぞかし。や。月こそ出て候へ

ワキ「げに〳〵月の出て候ぞや。あの籬が島の森の梢に。鳥の宿し囀りて。しもんに移る月影迄も孤舟に帰る身の上かと思出られて候

シテ「何と唯今の面前のけしきが。お僧の御身にしらるゝとハ若も賈島が言葉やらん鳥ハ宿す池中の樹　ワキ「僧ハ敲く月下の門　シテ「推すも　ワキ「敲くも　シテ「古人の心　二人上「今目前の秋暮にあり

＊小謡
上歌同＊「實やいにしへも月にハ千賀の塩竈の〳〵浦ハの秋も半にて。松風もたつなりや霧の籬の島隠れ。いざ我も立渡り昔の跡を陸奥の千賀の浦ハを眺めんや千賀の浦ハをながめん＊　ワキ「塩竈の浦を都の中に移されたる謂御物語り候へ　シテ「嵯峨の天皇の御宇に。融の大臣陸奥

の千賀の鹽竈の眺望を聞召し及ばせ給ひ此所に鹽竈を移しあの難波の御津の浦よりも日毎に潮を汲ませ爰にて鹽を燒かせつゝ一生御遊の便とし給ふ然れ共其後は相續して翫ぶ人もなければ浦は其まゝ干潮となつて池邊によどむ溜り水は雨の殘りの古き江に落葉ちり浮く松陰の月だにすまて秋風の音のみ殘る計なりされば歌にも君まさで煙絶えにし鹽竈のうら淋しくも見え渡る

※小謡 哉と貫之も詠めては※げにや眺むれば月のみみてる鹽竈の浦淋しくも荒はつる跡の世迄もしほじみて老の涙もかへるやらん。

※小謡 あら昔戀しや 上歌 同 ※戀しや〳〵と慕へども歎け共かひもなぎさの浦千鳥音をのみ鳴くばかりなり〳〵※

ワキ「いかに尉殿見え渡りたる山々は皆名所にてぞ候らん御教へ候へ

シテ「さん候皆名所にて候御尋ね候へ教申候べし

ワキ「先あれに見えたるは音羽山候か

シテ「さん候あれこそ音羽山候よ

ワキ「音羽山音に聞つゝ逢坂の關のこなたにとよみたれば逢坂山も程近うこそ候らめ

シテ「仰の如く關のこなたにとはよみたれ共あなたにあたれば逢坂の山は音羽の峯にかくれて此邊よりは見えぬなり

ワキ「偖々音羽の嶺つゞき次

第〳〵の山井の名所〳〵を語り給へ　シテ「語りもつくさじ言の葉の歌の中山清閑寺今熊野とはあれぞかし　ワキ「偖其すゑにつゞきたる里一村の森の木だち　シテ「夫をしるべに御覧ぜよまだき時雨の秋なれば紅葉も青き稲荷山　ワキ「風も暮れゆく雲のはの梢も青き秋の色　シテ「今こそ秋よ名にしおふ春は花見し藤の森　ワキ「緑の空も影青き野山につゞく里はいかに　シテ「あれこそ夕されば

ワキ「野べの秋風　シテ「身にしみて　ワキ「鶉鳴くなる　シテ「深草山よ　同「木幡山伏見の竹田淀鳥羽も見えたりや

ロンギ　地上「眺めやるそなたの空は白

雲のはや暮れそむる遠山の嶺も木深く見えたるはいかなる所なるらん　シテ上「あれこそ大原や小塩の山もけふこそ御覧じそめつらめ猶々問はせ給へや　地上「聞くにつけても秋の風吹く方なれや峯つゞき西に見ゆるは何くぞ　シテ下「秋もはや〳〵半ふけゆく松の尾の嵐山も見えたり　地上「嵐更行く秋の夜の空澄みのぼる月影に　シテ「さす塩時も早過ぎて　地「隙もをし照る月にめて　シテ「興に乗じて

同上「身をばげに忘れたり秋の夜の長物語よしなやまづいざや塩を汲まんとて持つや田子の浦東からげの塩衣くめば月をも袖にもち

鹽の汀に歸る浪のよるの老人と見えつるが鹽曇にかき紛れて跡も見えずなりにけり跡をも見せずなりにけり　中入

ワキ上歌「磯枕苔の衣をかたしきて／＼　岩根の床に夜もすがら猶も奇特を見やとて夢待顔の旅寢かな／＼

後シテ出端「忘れて年をへしものを又いにしへに歸る浪のみつ鹽竈の浦人の今宵の月を陸奥の千賀の浦わも遠き世に其名を殘す大臣融の大臣とは我事也我鹽竈の浦に心をよせあの籬が島の松陰に明月に舟を浮め月宮殿の白衣の袖も三五夜中の新月の色千重ふるや雪を廻らす雲の袖

地上「さすや桂の枝々に

シテ上「光を花と散らす粧ひ　地上「爰にも名に立つ白河の浪の

シテ「あら面白や曲水の盃　同「うけたり／＼遊舞の袖

地上ロンギ早舞打上「あら面白の遊樂やそも明月の其なかにまだ初月の宵々に影も姿もすくなきはいかなる謂なるらん

舞仕舞終りまで

シテ上「夫は西岫に入日のいまだ近ければ其影に隠さるゝたとへば月のある夜は星の薄きが如くなり　地上「青陽の春の始には　シテ下「霞む夕の遠山　地上「黛の色に三日月の　シテ下「影をふねにもたとへたり　地上「又水中の遊魚は　シテ「釣と疑ふ　地上「雲上の飛鳥は　シテ下「弓のかげにも驚く　地上「一輪も降らず　シテ下「万水も上

地上「聞くらず　「鳥の池邊の樹に宿し　「魚の月下の波にふす　十一

シテ「ともあかじ秋の夜の　「鳥もなき　地「鐘も聞えて　シテ「月もはや

影かたむきて明方の。雲となり雨となる此光陰にさそはれて。月の都に入り給ふ粧ひあら名殘おしの面影や。名殘惜しの面影

脇能　養老　四月

前シテ　老父　後シテ　山神の靈
ツレ　男子
ワキ　勅使　ワキツレ　從者

ワキ次第「風も靜にならの葉の〳〵ならさぬ枝ぞのどけき

ワキ詞「抑も是は雄略天皇に仕へ奉る臣下也。偖も濃州本巣の郡にふしぎなる泉出くる由を奏聞す。急ぎ見て參れとの宣旨に任せ。唯今濃州本巣の郡へと急ぎ候。

道行「治るや。國富み民も豊かにて。〳〵四方に道ある關の戸の。秋津島根や天ざかるひなの境に名をきゝし美濃の中道程なく養老の瀧に着にけり〳〵

シテツレ二人「一年を經し美濃のお山の松陰に猶すむ水の。縁かな　二ノ句「通ひなれたる老の坂。ゆくこと易き心

シテ　サシ「故人眼早く覺て夢の六十年の花に過ぎ　心は茅店の月に嘯き身の板橋の霜に漂ひ白頭の雪の積れども老を養ふ瀧川の水やこゝろを清むらん　奥山の深谷の下のためしかや流れを汲むとよも絶じ〳〵

長生の家にこそ〳〵老せぬ門のあるなるに是も年ふる山ずみの千世のためしを松陰の岩井の水の藥にて老をのべたるこゝろこそ尙行すゑもひさしけれ〳〵

ワキ「いかに是なる老人に尋ぬべき事の候　シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ　ワキ「おことの聞及びたる親子の者か　シテ「さん候是こそ親子の者にて候へ　ワキ「是の帝よりの勅使にてあるぞとよ　シテ「有難や雲井遙に見そなはす我大君の詔を賤しき身として今承る事の有難さよ是こそ親子の民にて候へ　ワキ「扨も此本巣の郡にふしぎなる泉出くる由を奏聞す急ぎ見て參れとの宣旨に任せ是まで勅使を下さるゝ也先々養老と名付そめし謂を委しく申すべし　シテ「さん候是には此尉が子にて候が朝夕の山に入り薪をとり我らを育み候處にある時山路のつかれにや此水を何となく掬びてのめば尋常ならず心も凉しく疲れもたすかり　ツレ「さながら仙家の